新制

新撰女子國語讀本

四年制用

卷五

375.9
Sa19
資料室

42401
教科書文庫
4
8/0
42-1941
200030
1498

資料室

昭和十六年十二月九日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

新撰女子國語讀本

新制

四年制用

375.9
Sa19

國學院大學
47511

早春

煙霧に包まれた素朴な民家
紅白の梅

石山太柏筆

新制

新撰女子國語讀本　卷五

目次

一　春を迎ふ　西條八十　一
二　曙光　柳澤健　五
三　日本發見　七
四　萬葉の輝き　一三
五　思出　薄田泣菫　二一
六　夢殿　高濱虛子　二四

七 松かさひろひ　中勘助　二九
八 幼兒の如くに　羽仁もと子　三二
九 競技精神　永井潛　三九
一〇 マッターホルン登山　横有恒　四三
一一 山を慕ふ心　田部重治　五一
一二 興國の樅　内村鑑三　五六
一三 打込む力　德富蘇峰　七〇
一四 色彩と自然　松本亦太郎　七五
一五 女流俳人　荻原井泉水　八三
一六 四方の海　九二
一七 最後の參内　〔太平記〕　九四
一八 新聞の話　小野賢一郎　九九
一九 俚諺論　大西祝　一〇三
二〇 柱くゞり　〔東海道中膝栗毛〕　一〇八
二一 有王島下り　〔平家物語〕　一一四
二二 東海道の歌　一二五
二三 學術の意義　芳賀矢一　一三二
〔自修文〕
一 言葉の上の喜劇　松村武雄　一三八
二 銀翼を輝かして　鈴木文史朗　一四七

三夜叉王　岡本綺堂　一五二
附錄
主要宛字表
類字表

南滿大學圖書之印

新制

新撰女子國語讀本　卷五

凜烈　リンレツ。寒さの烈しきこと。

ほつかり

一　春を迎ふ

暦面では二月上旬に既に立春を迎へたけれども、寒氣はなほ凜烈で、朝早く星を戴いて出る日などは、鋭い風が膚を刺すばかりであつた。雪も日を隔てて降り繼いだが、さすがに度重なるにつれて、漸く融けるのが早くなつて行つた。日中はほつかりと日が當つて、屋根から雪解の水が軒を傳つて落ちて止まない。眺めてゐると、珠玉となつては横に走つて落ちる。軒の玉水とはよく云つたものである。

ほぐる
とけはなる。

疎影横斜水清淺
林和靖の詩の一句。まばらな梅樹のかげが清き水に映りたるさま。

春の水云々
蕪村の句。

凍つてゐた大地が柔かくなり、冬枯の木の枝がほぐれて來る。南枝まづ綻び初むる梅は、衆花に先だつて、春の來たことを確實に告げる。梅は樹影を賞する。「疎影横斜水清淺」の趣は、他樹の遠く及び難いところであるが、たゞ新柳だけは、水を得て風情益佳である。

冬の間眠つてゐた泉も、生命を恢復して、生き〳〵して來た。落葉や枯枝を押流さうとして、水は其處に力を集中する。遂には目的を達して淙々と音を立てながら威勢よく石を洗つて流れる。またひとり、かやうなせゝらぎ、いさら小川のみではない。流れ集つて大河となつては、

春の水山なき國を流れけり

の句の如き、洋々たる趣を見せるのである。

凝結
ギョウケツ。

生く日の足る日
祝詞に、祭日をほめていふ語。生々として萬に事足る日の意。

生く國、足る國

潑剌
ハツラツ。元氣のあふるゝほど勢ひよきこと。

象徴
シャウチョウ。ものそれ自身が直接に或意味を表すこと。

馬醉木
アシビ。アセビ。

連翹
レンゲウ。木犀科に屬する落葉灌木。

春は流動し、夏は湛へ溢れ、秋は澄み、冬は凝結する。水だけでは無い。あらゆる物がかやうに感ぜられる。春は木の芽が萌るといふ義である。今までぢつと縮まつて堪へてゐた生命が、自然の緩みを得て流れ出すのである。

古語に「生く」と「足る」とを以て事物を稱讃する云ひ方がある。例へば「生く日の足る日」「生く國、足る國」の如きである。「生く」とは潑剌として生色あるを謂ひ、「足る」とは豐滿にして充實せるを謂ふ。この「生く」こそは、早春を象徴する語としても實に適切であると思ふ。

梅に續いて咲出る花が待遠しい。柳に後れて芽ぐみ來る新葉が期待される。櫻は國花、賞すべく貴むべし。椿・馬醉木にはすぐれた古歌が多く想起せられ、藤・山吹には逝く春が惜しまれる。桃・李・紅梅・海棠・木蘭・連翹等、支那趣味の花の多いのも賑はしい。樹葉

空林　木の葉の落ちつくした林。
萌える　在りとしも　山を燒く　春、草の發生を盛んならしむるために、野山の枯草を燒くこと。
蠢く　ウゴメく。
冬蟄　トウチツ。動物が冬期地中の穴にとぢこもつて活動せぬこと。
菜根云々　菜根は粗末な食物。此の句は、「菜根を咬み得ば、百事做すべし。」といふ呂氏師友雜志の語による。

は空林に煙の如く萌え初めたのが、亦と無く活氣を覺える。

闇の夜空に、在りとしも見えなかつた四方の山々の姿が、裾から段々浮き出して來る。風無き夜に火を放つて山を燒くのである。火は裾模樣のやうに山を包んで、上へと燃え昇り、山頂の一本松さへ夜空に煙つて眺められる。野山を燒いた跡には、微雨を待ちつけて、蕨が今にも頭を擡げるであらう。

小閑を得て、久しぶりに今日は屋後の岡に登つた。思の外に麥は青み百蟲は蠢いてゐる。江山一帶の煙霞に對し、揚雲雀の聲を聞きながら、冬蟄の啓けたことを喜んだ。世は正に春である。菜根を咬んで裏畑の土を耕し、以て我が家の食味を賑はしたいと思ふ。

芙蓉の峰　萬朶　バンダ。
洪恩

二曙光

亞細亞の東聖土あり。
天地の正氣鍾まりて
積むや芙蓉の峰の雪、
咲くや萬朶の櫻ばな。

萬古にわたる皇統は
空に燦たる天の河、
仰げばたかき洪恩に
一億の民たゞなみだ。

あゝ此の國の水清く

異邦

嘗て異邦に汚されず、
あゝ此の國の山青く
生々日々に新なり。

孝悌

君臣の義と父子の愛
花づなのごと交はりて、
仁慈と忠と孝悌と
琴の音のごと調べあり。

今歐西に日は暮れて、
光を呼ばふ聲すなり。
世界は明けむ、ほのぐと、
神の國なる東より。

（西條八十―日本精神）

北歐の水都　スウェーデン王國の首府ストックホルムをさす。

黝ずんで　クロずんで。

肯く　ウナヅく。

三　日本發見

五月の末から六月の初めにかけて、自分は關西から九州の方に旅した。それから間もなく鄕里の會津に旅した。新綠の日本は、遺憾なく自分の眼前にあつた。一昨年の新綠の季節を佛蘭西で過し、昨年の同じ季節を北歐の水都で過した自分の眼に、今年久しぶりで逢つた祖國の新綠風物は、言葉に盡せないものがあつた。

豐かで、優しくて、明るい佛蘭西の新綠。それから、淨らかで、朗かで、澄み切つてゐるやうなあの北歐の新綠。それと較べると、わが日本の新綠は、固くて黝ずんでゐて陰氣な氣さへなくはない。多くの洋畫家が日本に在つて、嘗て遊んだ歐羅巴をいつまでも懷かしんでゐるその心持は、さこそとも肯かれる。

土壌
ドジャウ。

嵐山の大悲閣
京都市右京區にあり。千手觀音を祀る。

然しながら、如何に歐羅巴の新綠が我等の感覺に快からうとも、我等の魂は、我等の肉體とともに、この國の土壌以外に生え育つたものではないのだ。我等は、この土壌の上の、固くて黝ずんでゐて陰氣にさへ見える新綠の中の、一本の樹木以外の何ものでもないのだ。我等の眼に映るこの新綠は、我等の存在それ自身でさへあるのだ。詩人は一ひらの葉にすら神を見るといふ。久しぶりに祖國の新綠に逢つた自分にとつて、この新綠をつくる一本の小樹、一ひらの青葉さへ、自分の姿があり〳〵と見える鏡なのであつた。こんな氣持で佛蘭西の新綠に向つたことが一度だつてあつたか知ら。

ある夕、自分は、一人の友人と打連れて嵐山の大悲閣にのぼつた。日は沈んだが、まだ明るかつた。冷々した苔の道。それをかくす

青山
セイザン。墳墓の地。

大宮御所
京都市上京區にあり。

二條の離宮
京都市中京區にあり。昭和十四年京都市に下賜さる。

やうな繁樹。新綠の匂は、顏に冷たく纏はりついた。脚下には保津川のひゞき。あゝ、そのひゞきと若葉と土の匂。若し自分が歲が少し若かつたならば、自分を泣かせるに十分でさへあつた。自分は全く「歸れる子」だつたのだ。今こそは自分の家に歸つて來たのだつた。——兩手をひろげて自分を抱いてくれる父母の家に。

青山は到るところにある。然し自分の父母のゐる青山は、この世に一つしかなかつた。

京都で、大宮御所と二條の離宮とをはじめて拜觀することができた。

御所のあの清淨さ、あのすが〳〵しさは、あの尊さとともに何と

昂然　カウゼン。

華麗　豪奢

言へよう。澄み亙つた五月の鮮かな朝陽。清砂のうへにひそやかに影を落す青葉と小鳥の影。いさゝ流の肅やかなひゞき。御所の中の「昔」の色と匂、充ち滿ちてゐるおごそかな影。自分の目から心から一切の現實は消えて行つた。殘るものは、その現實よりも遙かに強いある力と美とであつた。自分の心は頭よりも低くさがつた。否、低くさがつたと言ふよりも、寧ろ世にも誇らしげに昂然となつたと言つてもいい。「日本」の心臟のすぐ側に、今こそ自分は立つてゐるのであつた。

それから、あの二條の離宮。

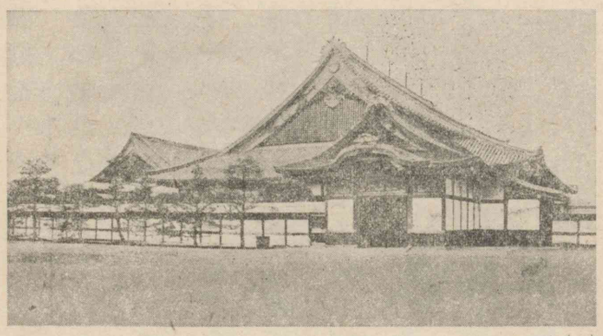
大宮御所のあの清淨な世界から、この派手やかな二條の離宮に移ると、自分はこゝにも日本の他の大きな心臟の波打つてゐるのを見ることができる。それは華麗な日本だ。豪奢な日本だ。強

ポールーモーラン　フランスの外交官。小說家。（一八八八―）

ミニヨヌリイ　（佛）小さくて可愛らしきこと。

バルバリイ　（佛）野蠻。

い色彩と激しい韻律との日本だ。



舊二條離宮

わが國を何でも小さいもの、可愛らしいもので片附けようとする外國人がゐる。また日本人自身にすら居る。然しかのポールーモーランが、日光の東照宮に詣でて感歎してゐるやうに、小さな可愛いミニヨヌリイの日本のほかに、強くて大きな日本、いい意味でのバルバリイとも言ひ得る日本があるのだ。二條の離宮を、いま日光に比較するのは當るまい。然し、この二つに共通してゐるところは、わが國をミニヨヌリイで片附けようとし

てゐる人々の僻見を、眞向から碎いてゐることだ。佛蘭西のあの華麗なヴェルサイユの宮殿。あれを見てわが國の旅人の多くが、その賑かさ派手やかさと、我等の清楚な趣味とは合致しがたいことを說くのを常としてゐるけれども、我等の祖先がこの賑かで派手やかな二條の離宮を創り上げたことを思ふならば、寧ろ我等にヴェルサイユの華麗に比すべき宮殿や傳統のある事を、外國人のまへに誇示しなければならないではないか。

我等はもつと過去を讀んでもよい。そして、平素氣が附かずにゐる我等自身を發見してもよい。

（柳澤　健―日本發見）

僻見

ヴェルサイユの宮殿　パリの南西にあり。曾てルイ十四世の居城。

清楚

傳統

過去を讀む

柳澤　健　外交官。詩人。東京帝國大學法科出身。福島縣の人。明治二十二年生。

四　萬葉の輝き

一　御進講の日

昭和六年五月七日、空うらゝに晴れて風なごやかなり。午後參內す。侍從長に導かれて御學問所の廊に立ちぬ。芝生綠なる前庭には、初夏の日の光あまねく輝き、西南の丘には、青葉が中に、紅の躑躅、錦を裝へり。小雀かとおぼしき鳥の聲聞ゆ。

御襖また壁上には、群れ飛べる燕を描き、欄間には浪を浮彫にせり。塗飾めでたき太平樂の舞人の木彫、廊に近く、臺の上に置かれたり。

陪聽の人々は、內府・宮相・次官・侍從長・侍從武官長・皇后宮大夫・女官長をはじめ、側近の人々なりき。

浮彫　ウキボリ。浮出しのほりもの。

太平樂　タイヘイラク。雅樂の曲名。

陪聽　バイチヤウ。御側に侍つて共に聽くこと。

萬葉學　マンエフガク。萬葉集に關する學問。
いひつべし　聞え上ぐ
天寵　テンチョウ。
家門の譽
先人　亡き父。こゝは、佐佐木弘綱。
すべ　方法。
恩遇　報い奉る

謹みて萬葉集に就きて進講し奉る。天顏咫尺にして、恐懼措く所を知らず。たゞ誠心誠意、遠き世の歌がたり仕へ奉る。

今日の御進講のこと、予が一身の光榮はいはむもかしこけれど、萬葉學の爲にも、亦光榮のきはみといひつべし。顧みるに明治四十五年には、東京帝國大學にして、明治天皇の御前に、萬葉集の古鈔本に就きて聞え上げ、今また兩陛下の御前にして、この無上の天寵を荷ふ。家門の譽、何ものかこれに若かむ。

今日五月七日は、陰曆と陽曆との相違はあれども、本居宣長翁生誕二百一年の日に當れり。翁の流を汲める先人の學を承け繼げる身として、感激胸にみち、言はむすべを知らず。更に萬葉學の爲に盡して、この恩遇に報い奉らむことを期するのみ。

（佐佐木信綱）

香具山　香久山とも書く。奈良縣磯城郡香久山村にあり。畝傍・耳成と共に大和三山の一。
持統天皇　第四十一代の天皇。
見そなはす

二　天の香具山

春過ぎて夏來たるらししろたへのころもほしたり天の香具山

持統天皇が、藤原の宮のほとりから天の香具山を御覽遊ばされて、お詠みになつた御製の歌である。

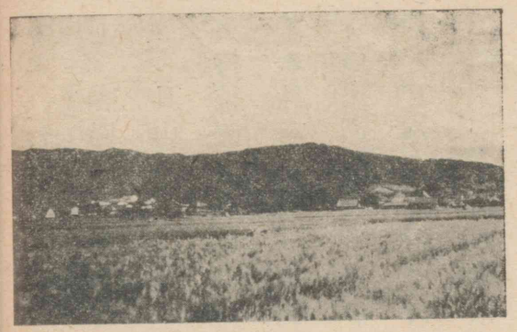
いつの間にか春が過ぎて、夏が來たさうな。此處から見える青青とした香具山に、白い布の衣が乾してあることよ、の意。

百人一首にこの歌を、二句を「夏來にけらし」四句を「衣ほすてふ」と誤つて入れ、且あまりに口馴れ耳馴れてゐる爲に、感じが薄められてはゐるが、佳い御歌である。綠の山裾に、白い衣の乾してある印象的の景を見そなはして、季節の移り變りの早いのに驚き給うた、いかにも女帝らしい御製である。なほ「衣ほすてふ」では「衣を乾す

敏馬　兵庫縣武庫郡。
野島　兵庫縣津名郡。
柿本人麻呂　飛鳥藤原時代の有名なる歌人。
藤原の都　奈良縣高市郡飛鳥村大字小原の地にあり。持統天皇より文武天皇を經て、元明天皇の奈良に遷都し給ふまでの都。

といふ」の意になり、人傳に聞し召したことになつて、御製の眞意をそこなふのである。

たま藻かる敏馬をすぎてなつ草の野島の崎にふねちかづきぬ



香具山

敏馬は、いま大阪から神戸へ行く海岸にある地である。野島の崎は、淡路にある岬である。これは柿本人麻呂が、藤原の都から西國へ赴く時の作で、歌の意味は極めて明瞭。美しき藻を刈る敏馬の浦を過ぎて、海路平安、野島が崎に船が近づいた喜を歌つたものである。

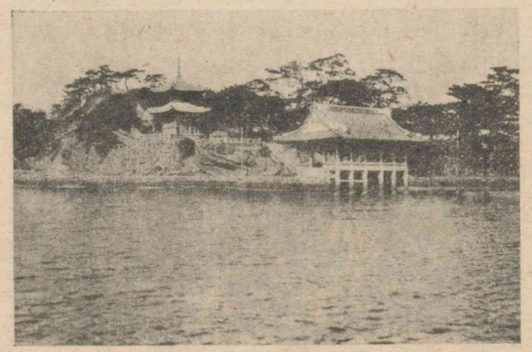
元來、旅行に關する後代の我が國の歌

羇旅　キリヨ。たび。
異彩
若の浦　今の和歌の浦をいふ。和歌山市の南方にあり。

の中に、最も缺けてゐるのは海洋を歌つた作、もしくは海上でうたつた作である。萬葉集の羇旅の歌のうちには、この種のものが比較的多く、爲に一種の異彩をなしてゐる。この歌の如きも、この種の作に屬する一つである。

わかの浦に潮みち來れば潟をなみ蘆邊をさして鶴鳴き渡る

若の浦の岸邊に、今しも滿潮とあつて、潮がさして來ると、潮干の時にはここかしこに見えてゐた洲も、見る〳〵隱れる。それとともに、その洲で今まで遊んでゐた鶴の群が、その場所を失つて、さらに陸に近い、蘆の生えてをるところをと指して、



和歌の浦

山部赤人　奈良朝時代の有名なる歌人。

神龜元年　聖武天皇の御代の年號。（一三八四）

山上憶良　奈良朝時代の有名なる歌人。類聚歌林の著あり。

聲高く鳴きつゝ飛んでくる。

潟をなみは、潮の干たところが無いによつての意。これを、片男波といふやうに俗に解して居るのは、をかしい誤である。

これは山部赤人が神龜元年の十月、聖武天皇に從うて、紀伊を遊覽した時の作で、長歌の反歌である。雄大に加ふるに、優美を以てし、しかも描寫が活きてゐる。寫生の作中の傑作であらう。

をのこやも空しかるべきよろづ代にかたり續ぐべき名は立てずして

こは山上憶良が、重き病の床に横たはりつゝ、感慨に堪へないで詠んだ作である。

苟も男子たるものにして、何のいさをも立てず空しく世を過すべしやは、萬代に言ひ傳へ、語り繼ぐべき立派な名は立てないで、の

熱情歌人

大伴家持　オホトモノヤカモチ。奈良朝時代の歌人。

明瞭暢達　メイレウチヤウタツ。

意。

由來名譽を重んじたのは、わが國古來の國民性の一特質である。この歌の如きは、この特質の最も鮮かに現された作である。而して萬葉集の熱情歌人憶良の面目の最もよく發揮された作として、注意すべきである。

秋の野に咲ける秋はぎあき風になびけるうへに秋のつゆ

おけり

大伴家持の作。歌の意味は、何等説明を要しないほど明瞭暢達である。野の萩の花が風になびいてゐる上に、露がおいてゐるのである。秋といふ語を四つ重ねて技巧を弄してはあるが、少しもいやみに感じないのは、ありのまゝの實景を詠んだからである。この歌とは全く趣を異にしてゐるが、同語を最も數おほく重ねた

明惠上人　京都府栂尾高山寺の僧高辨のこと。貞永元年歿。年六十。（一八三三―一八九二）

因に　チナミに。ついでに。

切實

佳作

歌が、鎌倉初期の明惠上人の集にあるから、因に擧げておかう。「あかあかやあか〳〵やあか〳〵やあか〳〵やあか〳〵や月。」

庭草にむらさめ降りてこほろぎのなく聲きけば秋づきにけり

庭に生ひしげる草に村雨がさびしく降つて、こほろぎのしめやかになく聲を聽くと、いかにも秋になつたといふことが感じられる、の意。平明のうちに、秋の深いさびしみが切實に歌はれてゐる。また一佳作とするに足りる。

はゆま路　驛路のこと。

宮津　京都府與謝郡宮津町。

由良　京都府加佐郡由良村。

朽尼　老いて勤の役に立たざる尼。

切戸まうで　切戸の文殊堂詣でのこと。切戸の文殊堂は京都府與謝郡吉津村大字文殊の海濱天橋立の南方にあり。臨濟宗の寺。

五　思出

春の夜はしづかに更けぬ
はゆま路の竝木のけぶり
箱馬車は轍をどりて
宮津より由良へ急ぎぬ

朧夜の窓のあかりに
京むすめ難波商人
朽尼や切戸まうでや
人の世の旅の道づれ

おくび　胃中の瓦斯が食道を通りて口に上り出づるもの。

追分節　俚謡の一つ。

さゝら水なみ　小波のこと。

物がたりおくびまじりに
眠り目のとろむとすれば
誰が子にか、しりへの方に
をりからの追分節や

清らなる聲ひとしきり
溪あひのさゝら水なみ
咽び音に響きわたれば
乘合は涙こぼれぬ

月落ちて闇の夜ぶかに
箱馬車は由良へとゞきぬ

客人（まらうど）は車をおりて
西東みちに別れぬ

その後や幾春へけむ
おぼかたは夢にうつゝに
しのびてはえこそ忘れね
由良の夜の追分上手

その子いま何處にあらむ
おもひでの清きかたみや
人々のこゝろに生きて
とことばに姿ぞわかき

（薄田泣菫―二十五絃）

とことばに　薄田泣菫　名は淳介。詩人。隨筆家。岡山縣の人。明治十年生。

えこそ忘れね　忘れえぬ。

夢殿　法隆寺の東院の中央にある八角圓堂。天平年間の創立。

上宮王院　東院の別號。

西門　四足門。

舍利殿　舍利及び聖德太子二歳の御像を安置す。

繪殿　聖德太子御一代の傳を描けるを以てこの名あり。

法隆寺　奈良縣生駒郡法隆寺村にあり。法相宗の大本山。推古天皇十五年（一二六七）聖德太子の創建。天平樣式の

六　夢殿

上宮王院の西門をはひる。夢殿の圓堂が中央に在つて、右には禮堂の長い建物、左には舍利殿・繪殿の連續した長い建物がある。寂寞として靜かだ。

こゝは法隆寺中、別に一區劃をなしてゐる。この地は昔聖德太子の住居された斑鳩宮の舊跡で、天平年間、その跡にこの堂宇を建てたものである。太子世におはした頃、常に三昧に入り、出でては夢に託して未來を語られる、それが必ず事實となつて現れたといふところから、この夢殿といふ名は起つたのである。

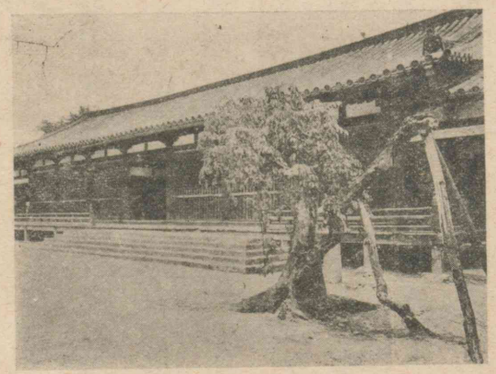
禮堂の建物は、薄つぺらなものではない。大きな柱の稍傾きかかつてゐながら、あまりあぶなげに感ぜられぬのは、もと〳〵建物

夢殿中心の東院と推古樣式の金堂・五重塔中心の西院とに分る。

天平年間　聖武天皇の御代の年號。（一三八九―一四〇八）

輪藏　轉輪藏の略。一種の經藏。

全體の安定がよいのに基づくのであらう。舍利殿も繪殿も扉が締つてゐて、中にあるものは見る事ができぬ。凸凹に蹈みへらされた厚い板の廊下の上を下駄で歩く。四邊が靜かなので、この音が際立つて高い。この音は、二つの殿堂の中央の折れまがつた廊下に入つて、その裏手の奥まつた所にある輪藏の前に止まる。中をのぞくと、冷たい佛臭い風が顏に當る。輪藏の守護神であらうか、丹碧の色彩の朧氣ながらに見られる佛體がある。下駄の音は、再び奥まつたその輪藏の前から起つて、舍利殿・繪殿の間を通つて、明るい先の廊下に出る。その廊下を今



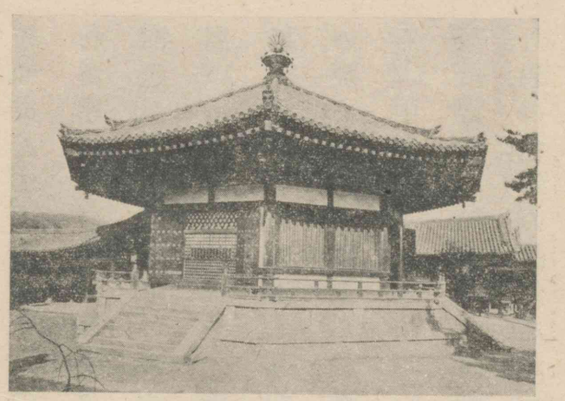
繪殿

その音が歩く

露盤　塔の九輪の最下部にある方形の盤。

一度その音が歩く。かた〳〵と歩く。廊下の長さだけ歩く。さうしてその音が、俄かにふつと消えた。廊下を下りて庭上に立つてゐた。

右に禮堂、左に舍利殿、繪殿を從へて、中央に靜かに立つてゐる八角の御堂が夢殿である。夢殿は、圓堂として、天平時代の模範的建物である。殊にその露盤は、美術上の意匠に於て、わが國第一位のものとして推稱されるところのものである。余は庭上に立つて、浮世繪によくある人物のやうに、がくりと首を後に落して、大空を仰いでこの露盤を見る。



夢殿

風鐸　フウタク。

眞鍮　シンチユウ。

露盤の上には寶珠がある。寶珠を抱いてリングがある。そのリングの上に、八つの風鐸が、玉盤を溢れる水のやうに周圍に垂れてゐる。微かに風が吹く。この風鐸が搖れる。音がするかと耳を傾ける。したかとも思はれる。しなかつたとも思はれる。また微かに風が吹く。また風鐸が搖れる。またしたかとも思はれる。しなかつたとも思はれる。

首が痛い。壞れかゝつた人形のやうに、がくりと首を垂れる。首を垂れて耳を澄ます。何の音もない。靜かに庭上を歩く。白い砂の上に春の日が當る。砂が餘り白い爲に、春の日が黃色いやうに思はれる。砂は銀の如く白い。その上に金の如き春の日が當る。眞鍮のやうな男が一人、力なくその中を歩いてゐる。鳴つた。確かに鳴つた。ちりりんと鳴つた。壞れた人形の首が、再び

がくり上を向く。風鐸が動いてゐる。

銀の庭上に金の日がさしてゐる。眞鍮のやうな人が、その中を歩いてゐる。さうして風鐸の音を何と形容したらよからうか。見ると、舍利殿と繪殿との連續した長い屋の棟に、同じ鳥が二羽とまつてゐる。何といふ鳥であらう。色の白い、嘴の長い美しい鳥だ。それが初めは遠く左右に離れて向合つてゐる。ぴよい、ぴよいと跳びながら近づいてくる。終に屋の棟の眞中で行合つて、二羽ともぴよこりと向きかはつて背中合せになつて、今度はぴよこ、ぴよこと跳びながら、左右に遠ざかる。

風鐸の音を何と形容したらよからうか。銀の棒で金の盤を敲いたのよりもよい音で、金の棒で琥珀の玉を敲いたのよりもよい音だ。

（高濱虛子）

重寶な・チヨウハウな。
狂奔・キヤウホン。

七　松かさひろひ

このあひだから吹きつゞけた北風を、いちどきに押しかへさうとするやうに、烈しく南風が吹く。私は、ふと思ひたつて、大きな笊と小籠とをもつて松かさひろひに出かけた。やにがあつて燃えやすいのと、風のとほりがいゝやうに開いてゐるので、このへんの重寶な自然のたきつけになつてゐるのである。雲といふ雲は、みなこの世のほかにけし飛んで、虛空らしい空に風ばかりが狂奔してゐる。目にみえない固形體のすばらしい塊が、あとからあとから飛んできて、落ちて轉がるやうな勢ひだ。その風に揉みぬかれたゝきのめされて、ふし靡く松の悲鳴を、頭上にきゝながら、私は、くぐりぬけくゞりぬけ、松かさを拾つてあるく。拾つても拾つても、

氣もちはない
三疊紀
地質時代の一。この時代は植物の化石に富む。

松の精
彷彿
ハウフツ。
こちたい
ことゝくし。
末社
本社に屬する小社。

拾ふそばから落ちる。見るからよく燃えさうにあぶらじんだのが、手にあまるほど鱗片をひろげてゐるのを、かさりととりあげる氣もちはない。いかにも三疊紀このかたのものらしい、をかしな形をしてゐるばかりか、それがたま〳〵枝をはなれて落ちたもので、もぎとつたものではないことが、またさしたる値うちもない、たゞそれだけのものだといふことが、かへつて私を喜ばせる。私は、なにがなし、そこに松の精などといふ原始的な神を心に彷彿させる。さうして、それが無上唯一のこちたい神ではなくて、ほどのしれた末社

松　原

第四紀
地質時代の一。この時代を古部と新部との二時代に分つ。新部は今の時代。人類はこの時代に屬する。
なくもがな
現代的精密
島國的細心

の神であるがゆゑに、それだけ親み、なつかしみをおぼえる。それはさて、私もまた第四紀からの生物でありながら、なまじひに進化とやらいふことをしたために、なくもがなの現代的精密と島國的細心をもつて、ひとつも殘さず拾つてゆく。籠にいつぱいためては、笊にあけかへあけかへする中に、汗ぐつしよりになつた。そこで山もりの大笊を抱へて、凱旋將軍の意氣ごみで歩きだした。當分たきつけは豐富である。私は疲れて家に歸り、顏を洗ひ汗を流しながら、人間をはなれて直接自然からのみその資を得るといふことが、どれほど我々の生活を淨く且趣味あるものにするかを思つた。

（中　勘助―しづかな流）

堪へて
緊張

八　幼兒の如くに

早春の頃、後庭の運動場を散歩して、冷たいベンチに二三十分も腰かけてゐると、身體が冷えてなりませんでした。座蒲團がほしくなつたりするのですが、そこにテニスの試合でもある時には、同じベンチに三時間以上も腰かけてゐても、少しも冷えはしないのです。啻に冷えてゐるのを忘れてゐるのではありません。實際少しも障つてはゐないのです。巧妙な球の行きかひ、瞬間ごとに勝敗の形勢の變つて行くコートの上に、一所懸命になつて見入つてゐるせゐでせう。同じ一つの身體でも、唯ベンチに掛けてゐるだけの時は、寒さ冷たさの刺戟に堪へて行くことは出來ませんけれど、全身が緊張してゐる時には、前と同じ寒さも冷たさも問題に

はなりません。何の工夫をした譯でもなく、ひとりでに刺戟に堪へられるのです。たゞ堪へられるばかりでなく、冷たい戸外に數時間を過したために、著しく元氣の加はつたことを感じます。

私たちは、緊張したい緊張したいと思つても、空つぽなコートを眺めてゐては、緊張することが出來ません。そこに熱心な試合の舞臺が出て來ると、別に緊張しようなどとは思はないでも、ひとりでに一所懸命に身體も心も引締つて來るのです。私たちは、どういふ時にも、自分の心身を引締めるだけの力のある舞臺に面して暮らさなければなりません。今日は張物もある、洗濯もある、あれもして置かなければならない、序に髪も洗つておきたいなどと思ふと、自然私たちの心持が引立つて、ずん〳〵仕事の捗つて行く樂しい一日が送れるのでも分ります。それでは私たちは、一生涯精

沒頭 ボットウ。熱中すること。

一杯に洗濯や張物をして暮らしたら、常に緊張した日々を送ることが出來るでせうか。言ふまでもなく、さうではありません。テニスの試合も、毎日々々見てゐたら、私たちを緊張させることが出來ないのは、空つぽのコートを見てゐるのと同じです。その日その日の仕事としては、私たちを緊張させることであつても、生涯それを續けることによつて、緊張した一生は得られないのです。女が、家事に沒頭して、一生を送るとしたら、やはり私たちがそれに面して生涯緊張し續けることの出來ない舞臺であることを知らなくてはなりません。

單調ではいけないといふならば、今日は張物をする、洗濯をする、明日は芝居を觀る、明後日は本を讀むといふやうな生活は、年中私たちを緊張させてくれるでせうか。あすは芝居にゆくと思へば、

どよめき

走馬燈 ソウマトウ。廻燈籠。

成長してゆく舞臺 芽出してゆく舞臺

張物は二日分も出來るでせう。働いた後で芝居を見るのは、一層樂しいでせう。人込みのどよめきを、過ぎ去つた幻のやうに思ひなして、一日靜かな部屋で本を讀んでゐたら、それも頭の中に浸みこむかも知れません。かりに誰でもかういふ生活が出來るとしても、かうした舞臺の轉換は、また私たちを一生涯緊張させてくれるでせうか。走馬燈は面白いものですが、幾度も幾度も廻つてゐる中には、厭になつてしまひます。同じものが出て來るのですから。

私たちの面してゐる舞臺は單調ではならない、といつて走馬燈のやうでもいけないとすると、外に私たちの持ち得る人生の舞臺にどんなのがあるでせう。段々に成長してゆく舞臺、芽出してゆく舞臺、唯それがあるばかりです。

緊張しようとも、何とも思はなくても、自ら緊張して、毎日元氣に嬉しさうに暮らすことの出來る子供のことを考へて見ても、それがよく分ります。彼等自身の成長と共に、彼等の生活の舞臺は日日成長し、且新しい働が芽を出してゆくからです。昨日まで坐ることの出來なかつた赤坊が、今日は坐ることが出來、坐るといふ働が段々確かなものに成長して行くと、いつの間にか立つといふ働が芽を出して來る。それが確かになると、歩く力が生れて來る。單純な叫び聲の中から短い言葉が生れ、またそれが成長してゆきます。赤や青の鮮かな色どりや、或物體の置いてあることを纔かに意識するだけであつたのが、玩具の形を見分けるやうになり、花とリボンとを區別することが出來、靜物と動物とが分り、彼等の中にある力が一つ〳〵芽を出して伸びてゆくだけそれだけ、彼等の

自分の境地を進める

生活の舞臺が擴がつて、さうして複雜になつて行くのです。それがどんなに樂しいでせう。緊張して活動を續けた日が暮れると、疲れて快き眠を貪り、明日はまた、その樂しい生活の舞臺に立たうとして、日の出るのを待ちかねて目をさまします。何といふ幸福な生き甲斐のある彼等の生活なのでせう。

どうしたら私たちは、常に幼兒のやうに毎日々々新しく幸福に生きられるでせう。この問題を解きながら、一足づつ自分の境地を進めて行くのは人生です。さうして、そこに私たちを絶えず緊張させるめい〳〵の舞臺があり、その舞臺を見つめて、努めてその中に心と身體とを強く働かせてゐると、私たちの心身の健康は自ら保たれ、味はひのある生がまた自らその中に爽やかに盛られてゆくのでせう。

人竝の經路

事務的

幼兒が物言ふことを覺え、歩くことを覺えるのは、彼自身にとつては、實に新世界を發見した程の喜なのでせう。しかも一人の人として本能の力の伸びたのは、唯その人の生命が人竝の經路を取つたといふばかりです。それ以上めい〳〵に、人として自分の價値をどこまで發揮することが出來るかどうかといふ所に、眞實に人間としての仕事があるのです。言ひ換へれば人間としての本舞臺はそれなのです。ふりかゝつて來た當面の仕事を、唯事務的に習慣的に取扱つてゐるだけでは、私たちの舞臺は空虛になつてしまひます。舞臺を空にしないで、走馬燈にしないで、事に當つて涌いて來る各自の思ひをとりあげとりあげ、幼兒のやうな限りなく張合ひのある日々を送つて行きたいものです。

（羽仁もと子―羽仁もと子著作集）

門閥

端的

徹底的

スポーツ

競技。

デモクラチック

スピリット

平民的精神。

九　競技精神

競技には、權勢もなく、門閥もなく、情實もなく、財力もない。全く裸一貫の身體と身體とがぶつつかつて、眞劍に、誠實に、無邪氣に、火花を散らして戰ふのである。さうして眞に強い者が勝ち、眞に弱い者が負けるのである。これくらゐ如實に、端的に、徹底的に、眞を發露するものは外にない。隨つて競技が眞理を愛する者、誠の道に從ふ者に取つて無上の歡であることは、申すまでもない。かくて眞を冀ふ希臘人をして、スポーツの國民たらしめたのである。また希臘の文化には、デモクラチックスピリットが何處までもその基調を成してゐる。この意味に於て、最もデモクラチックな精神を啓發するものとして、競技が喜ばれた。

思ふに、競技には年齢の相違もなく、身分の高下もなく、職業の差別もなく、見る者も、見らるゝ者も、悉く皆、同一の時、同一の場處で、同一の嗜好の下に打寄つて、我も人も、平等一如、悉く皆清い、美しい趣味のために融け合つてしまふ。この意味に於て、希臘人は甚だ競技を好んだのである。

競技は又、善を求むる人間の本性に對して、一道の力強い光明を與へる。何となれば、競技を行ふに際して、人間本然の德性、即ち善の性質が迸り出づべき多くの機會が惠まれるからである。

雪を凌ぎ霜に耐へて、凜として咲き出づる梅の花にも、優にやさしい香りがあるやうに、血涌き肉躍り、龍拏虎攫、火花を散らして鬪ひつゝある間にも、自ら競技道德の發露がある。その間に滾々たる友愛の情が涌き、懷かしい謙讓の德が流れ出る。

龍拏虎攫 リヨウヂヨコクワク。龍の如く捕へ、虎の如くつかむ。猛烈な爭鬪などを形容する語。

滾々 コンコン。

滿場闃として聲なく、固唾を呑み息を凝らして控へてゐる幾千の應援者、幾萬の觀客の前に、凜々しく立並ぶ選手を見ては、戰はざるに既に早く涙ぐましい氣分が涌く。應援者が選手の心を汲み、選手が應援者の心に感激する時、勝つも涙、負けるも涙、この清い溫かい涙の中に、一切の世間的功利的の利害得喪を超越した、純眞無垢の情緒が流露する。この清い溫かい涙の中に、純眞無垢の情緒の中に、我も人も思ふさま浸ることが出來るのである。かゝる清い享樂、純な氣分は、競技を措いて他に何物を以て代へることが出來るであらうか。文化が進むと共に生存競爭が愈烈しくなり、うき世の中が益せち辛くなつて來る今の時に於て、暫時なりとも、かういふ齷齪たる世の塵から脫れ出て、この綺麗な、無垢な境地に心を遊ばすことが、どれだけ善を冀ふ人間の本性に大いなる慰安と

闃として

功利的利害得喪情緒 ジヤウシヨ。觀念に伴なひて起る稍複雜なる感情。

齷齪

光明とを與へるであらうか。善を希求する希臘人が、いたく競技を喜んだのは當然のことであつた。

競技によつては、なほ幾多の德性が涵養される。個人と個人の對立して技を爭ふ時、眞に電光石火、寸分の隙も許されない。かくの如くして勇氣・果斷・克己・忍耐・敏捷・自信・努力等、人間が人間として世に處し事に當る上に、最も大切な幾多の德性の養成せらるべき機會が、競技によつて惠まれる。更に又團體競技を行ふに當つては、協心・節度・責任・義務・服從等、人間が社會生活をなし相互扶助を行ふ上に於て、缺くべからざる幾多の麗しい德性が培はれるのである。そしてこのことが、一國家として、一民族として、其の隆昌進運を來す上に、どれだけ大切であるかは、今更言ふを俟たないのである。

（永井　潛―人及び人の力）

涵養

電光石火　いなづまの光と石を打つて出る火。非常にはやいことに喩へていふ。

永井　潛　醫學博士。東京帝國大學名譽教授。國立北京大學名譽教授。廣島縣の人。明治九年生

一〇　マッターホルン登山

今は心も身も渾然として高鳴りしてゐるのだ。明日はその緊張を提げてマッターホルンに向はうとしてゐる。宵闇に傲然として肩を聳えさせて立つてゐる巨人マッターホルンだ。巨大なる斷崖のオベリスクは、私を下瞰して、胸の底まで見透してゐる。大空に戰を挑んでゐる强大な生命の姿である。私は不可能と思つてゐる遼遠な憧憬が、目の當りに忽然として現れたやうな困惑を感じた。そして其の戰く胸の波をじつと抑へて、「彼と取組むのだ。」と繰返して云つた。

私は起きるとすぐ、階下に下りて行つた。窓の外を見上げると、

マッターホルン　アルプスの一峰。瑞西・伊太利の國境にあり海拔四四八二米。

オベリスク　方尖碑。

遼遠　レウエン。

憧憬　ドウケイ。ショウケイ。

忽然

ザイル 綱。

間隙 カンゲキ。

ピッケル 登山用の杖。

星の降るやうな空だ。午前三時、我等三人はザイルで結び合うて出た。寢床のほとぼりの未だ去りきらない總身に、寒天は冷水一斗の覺醒を與へる。山ランプのゆらぐまゝに、足下に注意を拂つて登りだした。

マッターホルン

巨人は默然として太古のまゝの凝思の姿だ。この堅い姿を、三人は岩より岩へ、間隙より間隙へと傳ひ、山稜より離れて東面の崖を登つて行く。初めから岩登りであるが、岩が頗る固いので、足場にも手を懸けるにも確實で些の不安がない。

岩の間隙に雪が凍りついてゐるのを、ピッケルで碎いて手を懸

庇

ける隙を作る。私は、かゝる時の用意に、指先を切つた皮の手袋を使ふ。三人はひた登りに登る。四時過ぎであつたらうか、一面にうす明るくなつて來て、私等の動作が互に目につくやうになつて來た。かうなると氣の毒なのはランプだ。ランプは、闇の中の導者だ。一帶が其の程度の明るさになる時に、ランプは自ら力が減つてその存在を失ふのだ。

五時、正に巨人の頂は、天上の光を受けて赫と燃えた。其の光の足が驅けるやうに下りて來る。私等は其の間に、此の山に未だ小屋がなくて露營した時分の岩小屋の跡を過ぎた。それは岩塊の庇の下に石を積んだものであつた。故國での現在の小屋の樣と少しも違はない。後から來る者は、完全の恩惠に浴する。然し先人の苦勞と心氣とは味はふことが出來ないのだ。

爛々（ランラン）。

舞うた

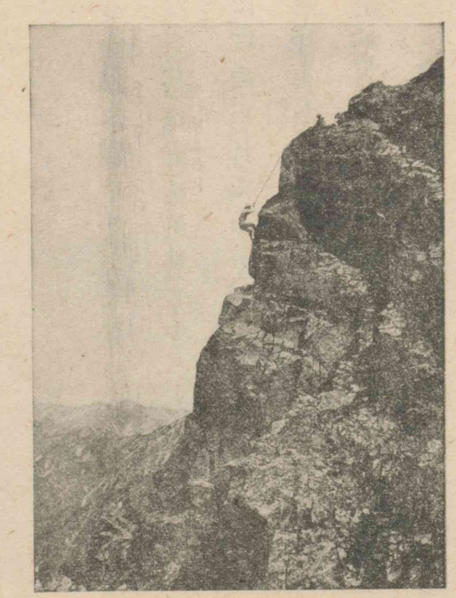
アルペン　こゝではアルプスの連峰をさす。

遂に私等も黎明の光に浴した。爛々たる大日輪が、燃え昇つて正面に面した。足下に千尺の斷崖が懸つてゐる。その崖の面を日光が下へ這つて行く。すると山鴉の一群が聲をたてて鋭く舞うた。

午前六時、ソルヴェー小屋に著く。山稜を削つて建てた二間四方位の岩乗な小屋である。海拔四千米と覺えてゐる。おそらくアルペン中最高に位する小屋であらう。それはマッターホルンが極めて天候の變化の激しい上に、峻險なるため、その避難を主たる目的として作られたものだ。この小屋は、ベルギーの人ソルヴェー氏の寄贈するものであつて、同氏の肖像が屋内に掲げてある。マッターホルンに於ける雷は有名なものだ。小憩、紅茶を沸かし食物を撮る。

クレヴァス　氷河などの深い割れ目。

登山に長休みは禁物である。これより登攀更に急を加へて來る。殆ど直立になつてゐる場處がある。然し太い繩が懸けてあるので、それを便りに容易に登る。私等は山稜に出でて攀ぢ登り出したが、山稜は極めて鋭く且屹立してゐる。しかし此の難しい場處にも、鎖や繩が三四個處懸けてあるので、苦もない。只其の繩にぶら下つて脚下を見ると、北面の崖下に縱横にクレヴァスの入つたマッターホルンの氷河が日に輝いてゐる。而も私等三人が此の繩に安心して釣り下つて登



岩登り

つた時である、其の繩を岩に止めた根元が、鋭い岩の角で指の太さ程に摩り切れてゐるのを認めた。フリッツは、下の小屋の番人の不注意をいたく怒つた。そして其の細つた繩を、メスで切り離してしまつた。

やがて所謂肩と稱する一段に達した。今迄の斷崖よりは傾斜の減じた積雪の稜である。其の上に足場の少い岩面に達した。岩面の僅かな間隙も氷に埋められてゐる。一八六五年の夏、ウィムバーの一行中四名が落死したのは、此處だと思ふ。

而も私等には其處に鎖があつた。やがて又雪稜に足場を切つて、忽ちにして頂に達した。頂は積雪の殆ど水平な狹い稜であつて、約百米も東から西へ走つてゐる。その東西兩端が一段高くなつて、東を瑞西國の頂、西をイタリーの頂とする。イタリーの頂の

近くに、鐵の十字架が立つてゐる。

私等が頂上に達したのは、朝の十時過ぎであつた。新しい雪の上に跡を印して頂に立つた。

實に靜かな無風な、晴朗な日和である。幾十幾百の鋭い岩と雪との山の波が、見渡す限り起伏した。そして起伏して輝いた。東から北へ、北から西へと、モントローザ・ドーム・ベルナーオーバーランド、それからモンブランと云ふ巨人達は、雪や氷河を頂いて立つてゐる。ニコライ谷の綠の中には、ツエルマットの村が手に取るやうに見える。そして山も谷も氷河

アルプスの連峰

雲海

メロン
甜瓜。

槇有恒
登山家。仙臺の人。明治二十七年生。

も牧場も、一齊に自分のものとなつた。何處の人何處の國の所屬であつても好い。然し此の小さい胸は、今は其のすべてを領有することが出來るのだ。南方イタリーの野は、さすがに暖風の渡るのであらうか、雲の海であつた。

私は默然として四周に見入つた。フリッツとブラヴアンドとは、東北に遠い故郷のベルナーオーバーランドを指して、頻りに其の峰々の名を求めてゐる。私等は、日を浴びながら、擔つて來たメロンを割つた。其の香り高い滴りは、四散して幾百十の險峰の上に薫つた。

（槇　有恒―山行）

山相

虚しう。
虚しく。

一一　山を慕ふ心

鮮かな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮べてゐる山相は、自然が作つた最も偉大なる藝術である。幾度眺めても仰いでも、それは見る人に、雄々しい心と、氣高い理想と、漲る血潮とを與へなければ止まない。山の姿ほど、無私な心を以て、清淨な魂を以て、憧憬し得られるものはない。

山を憧憬し、その姿にみづからを虚しうすることの出來る心に、純眞ならざるものはない。山を求める心は、この偉大なる自然の藝術を通じて、自然の魂と融けあひ、それが最も活きた力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絶えず行はれてゆく。

文藝復興期
十四世紀より十六世紀にかけて歐洲の思想界に一大革命起り、文物・學藝の上に著大なる進歩を劃したる時代。

浪漫的時代
ロマンチシズムの隆盛なりし時代。ロマンチシズムとは、十八世紀より十九世紀初頭にかけて獨逸に起り、歐洲各國に擴まりし文學上の一流派。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと思惟する文學者を、多く持つてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。また歐洲歴史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。ギリシヤ文化の歴史に於て、最も光輝ある文學・藝術を生み出した時代、また文藝復興期、十八世紀末から十九世紀の初めにかけての浪漫的時代は、何れもそれであつた。

日本の歴史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渴望の眼を投じた時代があつた。それは日本民族の最もあからさまな、最も清純な情緒の源泉ともいふべきかの萬葉人の時代であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は、餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一

文獻

つの傳統となつて、民族の一部には、登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし、明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。即ち大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、凄じい勢ひを以て、社會の各方面に動いてゐる。

かくして、あそこの山、こゝの溪谷は攀ぢられ、探求された。今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳・溪谷に關する傳說が求められるに至つた。昔から登ることが不可能だとされてゐた山、足を蹈み入れることの出來ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、究められないところが殆どなくなつた。

しかし山を眞に愛する人には、山を究め、溪谷を探り終へるとい

自己を超越する

ふことは、彼の山に對する喜悅の一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して抱き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでもいつまでも、同一の山、同一の溪谷に對してすら涌出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、かくして絕えず向上し、進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一つの山が持つ溪谷・深林、その麗しい色調、その朝夕の光線によつて全容に與へる變化、一歩々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの現象の中を流れる自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしないものは、一度頂上を究めると、その山に對する興味を失ふ人と共に、自然を機械的に見る人でなければならない。

跋渉　バツセフ。山川を歩きまはること。

田部重治　法政大學教授。富山縣の人。明治十七年生。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に質的に、山岳に對して深まり行く情緒に存することを、深く信ずるものである。その意味に於て、山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡すといふことで、決して行詰るものではないことを、私は茲に斷言したい。

（田部重治―山と溪谷）

デンマルク　丁抹。北歐の一小國。

一三　興國の樅

デンマルク本國は、決して富饒の地と稱すべきではないのであります。國に一鑛山あるでなく、大港灣の萬國の船舶を延くに足るものがあるのではありません。デンマルクの富は、主として其の土地に在るのであります。其の牧場と、其の家畜と、其の樅と白樺の森林と、其の沿海の漁業とに於て在るのであります。殊に其の誇りとする所は、其の乳產であります。其の乳油（バター）と牛酪（チーズ）とであります。デンマルクは、實に牛乳を以て立つ國であり、また柔和なる牝牛の產を以て立つ、小にして靜かなる國であります。

然るに、今を去る數十年前のデンマルクは、最も憐れなる國でありました。千八百六十四年に獨墺の二強國の壓迫する所となり、

腦漿　ナウシャウ。なうみそ。轉じて智慧。

銷沈　セウチン。

其の要求を拒みたる結果、終に開戰の不幸を見、デンマルク人は善く戰ひましたが、弱は以て强に勝つ能はず、戰敗れて再び起つ能はざるに至りました。而して敗北の賠償として、獨墺の二國に南部最良の地方を割讓しました。如何にして國運を恢復せんか、如何にして敗戰の大損害を償はんか、此の時に方り、デンマルクの愛國者が其の腦漿を絞つて考へた問題はこれでありました。國民の精力は斯かる時に試さるゝのであります。戰は敗れ、國は削られ、國民の意氣は銷沈し、何事にも手の著かざる時に、斯かる時に國民の眞の價値は判明するのであります。戰勝國の戰後の經營は、どんな詰らない政治家にも出來ます。國威宣揚に伴なふ事業の發展は、どんな詰らない實業家にも出來ます。難いのは戰敗國の戰後の經營であります。國運衰退の時に於ける事業の發展であり

幽暗

斃る
タフる。

ます。戰に敗れて精神に敗れない民が、眞に偉大なる民であります。宗教と云ひ、信仰と云ひ、國運隆盛の時には何の必要も無いものであります。然しながら國に幽暗の臨んだ時に、精神の光が必要になるのであります。國の興ると亡ぶるとは、其の時に定まるのであります。どんな國にも、時には暗黑が臨みます。其の時是に打克つことの出來る民が、永久に榮ゆるのであります。恰も疾病の襲ふ所となつて、人の健康がわかると同然であります。平常の時には弱い人も強い人と違ひません。疾病に罹つて、弱い人は斃れて、強い人は存

デンマルク製乳場

ユットランド
デンマルク半島の名。

沃饒
ヨクゼウ。土地が肥えて產物の多きこと。

るのであります。其の如く、眞に強い國は、國難に遭遇して亡びないのであります。其の兵は敗れ、其の財は盡きて、其の時尙起るの精力を蓄ふるものであります。これは誠に國民の試錬の時であります。此の時に亡びない彼等は、運命の如何に關はらず、永久に亡びないのであります。

茲にダルガスといふ工兵士官がありました。齡は今三十六歲、工兵士官として戰爭に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘るの際、彼は細かに彼の故國の地質を研究しました。而して戰爭未だ終らざるに、彼は既に彼の胸中に、故國恢復の策を立てました。即ちデンマルク國の歐洲大陸に連なる部分にして、其の領土の大部分を占むるユットランドの荒漠を化して、是を沃饒の地となさんとの大計畫を、彼は既に彼の胸中に立てました。故に戰敗れて、彼の同

首に希望の春を戴く

復讐戰 フクシウセン。

僚が絶望に壓せられて、其の故國に歸り來つた時に、ダルガス一人は其の面に微笑を湛へ、其の首に希望の春を戴きました。

「今やデンマルクに取り惡しき日なり。」

と彼の同僚は言ひました。

「誠に然り。」

とダルガスは答へました。

「然しながら、我等は、外に失ひし所のものを內に於て取返すことが出來る。君等と余との生存中に、我等はユットランドの曠野を化して、薔薇の花咲く處となすことが出來る。」

と彼は續いて答へました。他人の失望する時に、彼は失望しませんでした。彼は、彼の國人が劍を以て失つた物を、鋤を以て取返さうとしました。今や敵國に對して復讐戰を計畫するに非ず、鋤と

夢想家

鍬とを以て殘る領土の荒漠と鬪ひ、是を田園と化して、敵に奪はれた物を補はうとしました。

然しダルガスは單に夢想家ではありませんでした。工兵士官なる彼は、土木學者であつたと同時に、又地質學者であり、植物學者でありました。彼は斯くの如くにして、詩人であつたと同時に、又實際家でありました。彼は理想を實現するの術を知つて居りました。

ユットランドは、デンマルクの半分以上であります。而して其の三分の一以上が不毛の地であつたのであります。面積一萬五千平方哩のデンマルクに取りましては、三千平方哩の曠野は、過大の廢物であります。是を化して良田沃野となして、外に失つた所のものを內に在つて償はうとするのが、ダルガスの夢であつたの

であります。而してこの夢を實現するに方つて、ダルガスの執るべき武器は唯二つでありました。其の第一は水であり、其の第二は樹でありました。荒地に水を漑ぐを得、是に樹を植ゑて、植林の實を擧ぐるを得ば、それで事は成るのであります。事は至つて簡單でありました。然し、容易ではありませんでした。

今より八百年前の昔には、其處に繁茂せる良き林がありました。而して降つて今より二百年前までは、處々に槲の林を見ることが出來ました。然るに文明の進むと同時に、人の慾心は益〻增進し、彼等は土地より取るに急にして、是に酬ゆるに緩でありました故に、地は時を追うて益〻瘠せ衰へ、終に數十年前の憐れむべき狀態に立到つたのであります。然し人間の强慾を以てするも、地は永久に殺すことの出來ないものであります。神と天然とが示す或適當

漑ぐ ソソぐ。

酬ゆるに

の方法を以てしますれば、此の最惡の狀態に於てある土地をも、元始の沃饒に返すことが出來ます。誠に詩人シルレルの言つたやうに、天然には永久の希望あり、壞敗は是をたゞ人の間に於てのみ見るのであります。

先づ溝を穿つて水を注ぎ、ヒーズと稱する荒野の植物を驅逐し、是に代ふるに馬鈴薯或は牧草を以てするのであります。此の事は左程の困難ではありませんでした。然し難中の難事は、荒地に樹を植ゑることでありました。此の事に就いて、ダルガスは非常の苦心を以て研究しました。而して彼の心に思ひ當りましたのは、ノルウェー產の樅でありました。是は

シルレル ドイツの詩人。（一七五九—一八〇五）

壞敗

難中の難事

デンマルクの農業

生える

ユットランドの荒地に成育すべき樹であることは分りました。然しながら實際是を試驗して見まするとと、思ふ通りには行きません。樅は生えまするが、數年ならずして枯れて了ひます。ユットランドの荒地は、今や此の强健なる樹木をさへ養ふに足るの養分を殘しませんでした。

然しダルガスの熱心は、これがためには挫けませんでした。彼は、天然は亦彼に此の難問題をも解決して呉れる事と確信しました。故に、彼は更に研究を續けました。而して彼の頭腦にふと浮び出したことは、アルプス產の小樅でありました。若し是を移植したならば如何と彼は思ひました。而して是を取來つて、ノルウエー產の樅の間に植ゑました時に、不思議なるかな、兩種の樅は相竝んで生長し、年を經るも枯れなかつたのであります。茲に於て

釋く

希望の色

野心的慾望

大問題は釋けました。ユットランドの荒地に、始めて綠の野を見ることが出來ました。綠は希望の色であります。ダルガスの希望、デンマルクの希望、其の民二百五十萬の希望は實際に現れました。

しかし問題は未だ全く釋けませんでした。綠の野は出來ましたが、綠の林は出來ませんでした。ユットランドの荒地より建築用の木材をも伐り得んとの、ダルガスの野心的慾望は、事實となつて現れませんでした。樅は或程度まで成長して、それで成長を止めました。其の枯死はアルプス產の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其の永久の成長は是に由つてとげられませんでした。

「ダルガスよ、汝の豫言せし材木を與へよ。」

奇態

と言つて、デンマルクの農夫等は彼に迫りました。彼の長男をフレデリック・ダルガスといひました。彼は父の質を受けて善き植物學者でありました。彼は、樅の成長に就いて大なる發見を爲しました。若きダルガスは言ひました。大樅が或程度以上に成長しないのは、小樅を何時までも大樅の側に生やして置くからである。若し或時期に達して小樅を伐り拂つて仕舞ふならば、大樅は獨り土地を占領して、其の成長を續けるであらうと。而して若きダルガスの此の言を實際に試して見ました所が、實に其の通りでありました。小樅は或程度まで大樅の成長を促すの能力を持つて居ります。然し其の程度に達すれば、却つて是を妨ぐる者であるとの奇態なる植物學上の事實が、ダルガス父子に由つて發見せられたのであります。而も此の發見は、デンマルク國の開發に取

挽回 バンクワイ。とりかへす。
鬱蒼

四六時中

つては實に絶大なる發見でありました。是に由つてユットランドの荒地挽回の難問題は解釋されたのであります。これよりして、各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至りました。

然し植林の效果は、單に木材の收穫に止まりません。第一に其の善き感化を蒙りたる者は、ユットランドの氣候でありました。樹木の無き土地は、熱し易くして冷め易いのであります。故にダルガス植林以前に於ては、ユットランドの夏は、晝は非常に暑くして、夜は時に霜を見ました。四六時中に熱帶の暑氣と初冬の霜とを見るのでありますから、植物は堪つたものではありません。其の時に方つて、ユットランドの農夫が收穫成功の希望を以て植うるを得た植物は、馬鈴薯、黑麥、其の他少數のものに過ぎませんでした。然し、植林成功後の彼の地の農業は一變しました。夏期の降

瀕する

霜は全く止みました。今や小麥なり、砂糖大根なり、北歐產の穀類又は野菜にして成熟せざるものなきに至りました。木材を與へられた上に、良き氣候を與へられました。

然し植林の善き感化は、是に止まりませんでした。樹木の繁茂は海岸より吹送る所の砂塵による荒廢を止めました。北海に瀕する國に取つては、敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は、戰鬪艦ならずして、綠の樅の林を以て、茲に美事に擊退されたのであります。

霜は消え、砂は去り、其の上に第三に洪水の害が除かれたのであります。これ何處の國に於ても、植林の結果として直ちに現るゝものであります。勿論海拔六百尺を以て最高點となすユットランドに於ては、我が邦のやうな山國に於て見るが如き洪水の害を被ることはありません。然し比較的に少き此の害すら、ダルガス

市邑

内村鑑三 思想家。昭和五年歿。年七十。

の事業に由つて免るゝを得たのであります。

斯くの如くにして、ユットランドの全州は一變しました。廢れた市邑は再び起りました。新に町村は設けられました。道路と鐵道とは縱橫に敷かれました。ユットランドは復活しました。戰爭に由つて失つたスレスウィグとホルスタインとは、今日已に償はれて尙餘りあるとのことであります。

然し木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、畜產よりも、更に貴いものは國民の精神であります。デンマルク人の精神は、ダルガスの植林成功の結果として茲に一變しました。失望せる彼等は、茲に希望を恢復しました。彼等は國を削られて、更に新に良き國を得たのであります。而も他人の國を奪つたのではありません。已の國を改造し得たのであります。

（内村鑑三―デンマルク國の話）

水到れば渠成る　餘冬序錄に見ゆ。

囊括　要語

天堂　テンダウ。極樂淨土。天國。

一三　打込む力

釘を板上に載せたればとて、其の儘になし置く時は、何時まで經るも其の儘なるべし。釘は釘なり、板は板なり。たゞ之を金槌にて打込むに於ては、釘が板に入りて始めて其の効用をなすなり。これしきの理窟は三歳の小兒も解する所たるに拘らず、三十歳の壯夫にしてなほ之を會得せざるが如き者あるは何ぞや。

水到れば渠成り、莢披けば豆落つとは、自然の作用を囊括したる要語なり。されど、世の中は唯自然の作用にのみ一任し、人間は自然の傍觀者たるを以て滿足すべしとなすが如きは、以ての外の妄想なり。かゝる妄想は畢竟、怠惰漢の天堂にあらずんば、横著者の極樂たるのみ。吾人は固より自然界の作用を計上せざるべからず。而も、水卑きに就くを原則とすれども、之を卑きに導くには多少の人力を要せざらんや。豆は熟して落つれども、其の收穫には又人間の加工を要せざるを得ず。自然を相手とする仕事すら斯くの如し。況んや人事に於てをや。若し徒に周圍の事情のみを顧慮して、自ら發作する所なくんば、人は唯路傍に倒れたる枯木と一般ならんのみ。

人の智愚相距る遠からず、彼の思案する所は概ね我の思案する所なり。其の相違の因りて生ずる所以は、一は之を實行し、他は之を實行せざるにあり。否、一歩を進めて觀察すれば、一は之を實行するも透徹せしむるの努力を加へず、他は之を加ふるの相違に依る。言換ふれば、金槌を振上げて打込むと否との相違に依る。

太閤記を讀む者は、天王山が如何に羽柴・明智兩軍の爭地たりし

透徹

天王山　山城國（京都府）乙訓郡に在り。天正十年（一五八二）羽柴秀吉と明智光秀と戰ひし處。

糠に釘
糠に釘を打つの略。手ごたへ無く、利目の無き譬。
放漫

かを知らん。其の形勝の地たるを知るに於ては、光秀も秀吉も異なる所なし。たゞ秀吉の打込む力が光秀に勝りたるのみ。凡そ世の中に競争あるは雙方の力相匹すればなり。而して勝敗の分るゝは、相匹するに拘らず打込む力の差等に依ること多し。要するに同様の力ならば、十回叩く者よりも二十回叩く者を以て優れりとせざるを得ず。二十回よりも三十回を優れりとせざるを得ず。箇中の消息は、「水到渠成。」を夢みて、晝寢を貪る怠惰漢の能く理解する所に非ず。諺に、「糠に釘。」と云へり。これ相手が放漫にして釘止りなきを意味す。されど、世事を概觀すれば、糠に釘に非ずして、石に釘の趣なき能はず。故に、自ら認めて既に入る三寸と思ふものが、却りて依然表面に印したるのみにして、入りたるにあらず、却りて折れたるに過ぎざることあり。人間は、すべてに自惚あれ

ども、自己の努力に對しては最も自惚多しとす。されば、果して打込み得たりや否やは、單に釘の表面に露出したる長短を以て下すべからず。宜しく其の中心に透徹したる深淺に就いてこれを測定せざるべからず。打込む力の輕重は勿論なれども、相手の品質は最も吟味に値するものあり。即ち糠を相手とすると、板を相手とすると、石を相手とするとは、自ら差別なき能はず。

吾人は我が意志の、他に徹底すべくして徹底せざるを見て、「糠に釘。」てふ諺を反復することあり。されど果して然るか。或はさる事もあらん。されど、多くの場合に於ては、糠と思ひしは石にして鐵釘と思ひしは却りて竹釘たりし事なきに非ず。吾人は云はんとす、「人に命令して其の命令の行はれざるが如きあらば、そは自己の打込む努力の不足に反らざるべからず。」と。これ寧ろ他を咎む

翠光

商量

決鬪

一氣呵成

徳富猪一郎

蘇峰と號す。評論家。貴族院議員。帝國學士院會員。熊本縣の人。文久二年生。

るよりも自ら咎むべきを至當となすなり。然りと雖も、吾人の所說は相手を構はず何物にも打込むべしと云ふに非ず。苟も打込まんとするには、果して其の必要あるか、果して其の見込あるか、果して其の確信あるかを、商量せざるべからず。出來ぬ事と知りつつ之を行ふは、愚に非ざれば狂なり。中途にして廢棄する程ならば、固より當初より企てざるに若かず。而も一旦打込むべしと決斷したる以上は、腕と相手との決鬪なり。板にもあれ、石にもあれ、鐵にもあれ、之を打ち、之を叩き、腕が折れても、金槌が碎けても、之を打込まざるべからず。而して既に寸餘を打込まば、其の餘勢は一氣呵成に透徹せずんば止まず。これ所謂自然の勢なり。自然の作用は唯努力者にして始めて之を利用するを得るなり。

（徳富猪一郎―打込む力）

一四　色彩と自然

自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心持の方から見ると、全色彩をまづ二つに大別することが出來る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩とである。寒冷色の中心は青であつて、青に近似の色は青綠から紺青に至るまで、皆涼しい感じを與へる。溫暖色の中心は橙黃であつて、これに近似の色は、暗赤色から黃綠に至るまで、皆暖かな感じを與へる。

日本やイタリーあたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに、いづれの國民も、このやうな青々とした空を戴いてゐるといふわけにはゆかない。北歐諸國では、晴れてゐる時でも、空氣が透明でなく、空は灰色になつてゐる。勿論多少の青みはあ

青天白日の美

重疊

飽和
ハウワ。

るが、さえ〴〵とした青色ではなく、鉛のやうな色をしてゐる。隨つて、晝でも天體の光が朦朧としてゐる。我々日本人は、イタリーの風色をあまり美しいとは思はないけれども、北歐の人がイタリーの自然を讃美してやまないのは、彼等は青天白日の美を日常見ることが稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透るためである。遠山の青いのも、重疊した空氣を透して山を見るためである。大空の色は飽和の度の強い青ではない。濃い青を日光をもつて薄くしたのだ。あの淡青、卽ち空色は靜かな色だが、喜悅の色である。

最も濃い青は、深い海の表面においてこれを見ることが出來る。それは卽ち紺青である。太平洋上、或は印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡つて行くのであるが、極めて濃厚な紺青は、その深さ一

沈鬱

爽快
サウクワイ。

萬七八千呎もある大西洋の水面において、これを發見することが出來る。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議であるが、咲いた花は忽ちに紺青に染められ、雪白と紺青との爭は限りもなく繰返されて、二つの色彩の活躍する狀は、甚だ目覺しく、航海中の一の慰めである。紺青はいかにも美しいけれど、沈鬱で、一種の凄みがある。

ギリシヤの內海や、イタリーの沿岸の水のやうに、海が淺くなれば、紺青はやゝ淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化したやうに爽快になり、更にスキスの山間ルツェルンの湖水となれば、藍青は綠を帶びて、あたかも翡翠の玉を水に化したやうになり、色は靜かであるが、沈鬱の趣は淡くなる。ライン川の上流などになると、綠色はますます勝つて、青色を壓する。尤も、河の水は鑛物性或は植物性の溶

解物があつて、種々に著色せられるけれど、概して水は深きより淺きに移るに隨ひ、紺青より青を經て綠に移るのである。人間は眼界が狹く、一局部のものしか見えない。

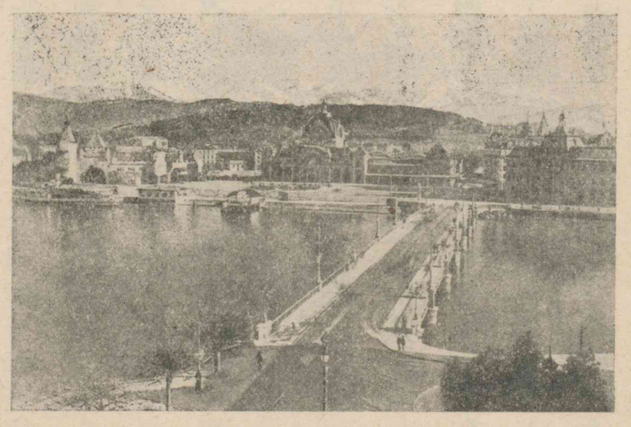
局部

しかも、その局部には種々な色が現れてゐるが、地球の表面の大部分を形成してゐる水の色が青であり、そしてまた天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐるといはなければならない。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が絶えず行はれてゐる。

主調

花の中にも、あやめ・紫陽花・

紫陽花　アヂサヰ。虎耳草科に屬する落葉灌木。



ルツエルン湖

野生の朝顏など、いづれも涼しく、靜かに人の心を休息させる色である。

寒冷色の青と正反對なのは橙黃色である。これは暖かい色であるとともに、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は、最も光輝ある橙黃色である。秋の夕陽が西山に沒せんとする際の空の色は、太陽から出る黃金色の本性を最もよく發揮する。例へば、東海道で見る富士の背後に日の沒する際や、京都の愛宕山の後に日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山嶽の碧色と相對比して、その見榮えが一層である。私の心に最も強い印象を殘したのは、紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山が絶頂から黃金の光を浴び、山の中腹にかゝつた雲は、黃金の神火が燃えるやうに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中に

金箔の空

シナイ山　アラビアのシナイ半島にあり。

いはん方なく

エホバ　ヘブライ人の尊敬せし神。
イスラエル　昔のユダヤをいふ。
アポロ　ギリシヤやローマの神話に出てくる藝術の神。
汚濁　ヲダク。

エホバの聲が聞えたとか、暗中に火の柱が立つて、イスラエルの民の沙漠旅行を先導したとかいふやうなユダヤの神話は、あゝいふ景色から涌出したのではあるまいかと想はれた。太陽の光線も、日本ではさまで強烈ではないが、ギリシヤのアテネ附近の夏の太陽といつたら、朝から強い光輝を放つて、その光が大理石質の地面に反射する時は、眼に痛みを覺える。ギリシヤ神話で、太陽の光線をアポロの射た矢であるとしたのも、なるほどと合點せられる。

太陽の光が、月や星に反映する時は、よほど趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限りにおいては、熱烈な黃金色となるが、月に映じた時はやはらかく、幾分冷やかな色になる。地平を出る時の月は、空氣の汚濁してゐるため銅色を帶びてゐるが、だん〳〵高くなつて、澄み渡つた空氣を透かして月を見ると、空氣の青色が

發顯
寒暄　カンケン。
非情の生物

加はつて來るために、月は黃金に銀を混じたやうに、やゝ蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體・天象の色としての黃金色は、その發顯の規模が大きく、種々人の心を躍動せしめるのであるが、小規模においては、地上の花鳥の色となり、人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は、何人が眺めても喜悅を感ずる。その他、連翹・山吹・月見草・黃菊・水仙の類、四季の花として、いづれも優しい、懷かしい趣がある。

紺青と橙黃との中間に位してゐるのが、綠色及びそれに近似の色である。綠色は寒暄相和し、興奮・沈靜相合し、いはゆる折衷的な性質を有する色である。地上における非情の生物の有する特色であつて、天にはない色である。人間がいつまで眺めてゐても飽きない色は綠である。若草や若葉は大抵帶黃綠色で始まるが、日

を經るに隨ひ、綠色となり、終に暗綠色となる。

若葉の萌出る時は、まことに美しい。氣が伸び〳〵する。五月初めの若葉の景色は、四月初めの花の景よりも、實に遙かに趣が深い。東台の新綠、京都東山の新綠、宇治の新綠、嵐山の新綠を訪うて樂しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を樂しむ心をもつてゐないことを示してゐる。佛獨あたりでは、花に對してあまり騷がないが、森林の色を樂しむことは隨分盛んである。パリの公園の初夏の滴るやうな新綠が、都人士の心をひきつけることは、實に大なるものである。また英國や米國では面積の廣大な芝生をつくることが實に巧で、その國民が綠色趣味に富んでゐることをよく示してゐる。

（松本亦太郎―渡り鳥日記）

東台　東京の上野の山。

松本亦太郎　文學博士。心理學者。東京帝國大學名譽教授。帝國學士院會員。群馬縣の人。慶應元年生。

芭蕉　松尾氏。蕉風俳諧の祖。伊賀の人。元祿七年歿。年五十一。（一六四〇―一六九四）

乙州　俳人。大津の人。

智月尼　俳人。芭蕉の門人。近江の人。

去來　向井氏。俳人。芭蕉の門人。寶永元年歿。年五十四。（一六五一―一七〇四）

凡兆　俳人。芭蕉の門人。加賀の人。

七部集　芭蕉の撰びし冬の日・春の日・曠野・比左古・猿蓑・炭俵・續猿蓑の七部の俳書の稱。

一五　女流俳人

女流の俳人は、古來甚だ少い。芭蕉の時代に乙州の母の智月尼、去來の妹のちね、凡兆の妻の羽紅は、七部集の中にもその句が見えてゐるし、伊勢の園女や、加賀の千代女や、江戸の秋色女などは、逸話を以てその名が著れてゐる。これ等の女流を一作家として見ると、さして秀でた人はないやうであるが、女は女だけに、感情の調子が柔かくて潤がある。それが、枯木に時雨の音を聞くやうな、閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍しく、寒椿の一二輪を見るやうな氣がする。

女流の俳人には二つの型がある。一つの型は、弱々しく纖細で、若くて佳い句を殘して、死んで行く人である。ちねも三十にならし

園女　度會氏。斯波一有の妻。芭蕉の門人。享保十一年歿。年七十四。（二三一三—二三八六）

千代女　俳人。加賀松任の人。安永四年（二四三五）歿。

秋色女　大目寒玉の妻。俳人。其角の門人。享保十年（二三八五）歿。傳未詳。

文政　仁孝天皇の御代の年號。（二四七八—二四八九）

花讃女　古川氏。名はまつ。俳人。萬里の門人。天保元年（二四九〇）歿。

ずに死んだらしく、文政年間の花讃女も二十三で死んだ。他の一つの型は、夫に別れてから、孤獨の心を俳句で慰めて、隱遁的に安住したり、又は髪を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つて來る人である。この型の人は、皆長生をしてゐる。園女は七十四歳、智月尼も七十四歳、千代女は七十五歳、捨女は六十五歳、多代女は九十歳までも生きた。

園女は伊勢の松坂の產で、晩年芭蕉が大阪の其の家に立寄つた時、「白菊の目に立てて見る塵もなし。」といつて賞讃した句を以て見ると、いかにも貞淑な、清艶な婦人であつたらしく思はれる。

寢どころへ扇にすゑし螢かな

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな

かうした句も女らしい。

捨女　田氏。俳人。丹波の人。元祿十一年（二三五八）歿。

たへまにまうてゝまんたらをおかみて
衣更みつからをらぬ罪ふかし　その女

多代女　市原氏。俳人。岩代の國須賀川の人。慶應元年歿。年九十。（二四三六—二五二五）

逸脫　照降町　今の日本橋區小舟町。

園女筆

その後、園女は江戸に出て深川に住み、眼科醫を生業とした。又禪を學んで、智鏡尼と名を代へた。剃髪をした頭上に、わざと十本許りの髪の毛を殘して置いたといふのでも、晩年にはよほど逸脫して、女離れがしてしまつたやうである。

智月尼の句には美しい繪畫がある。

山ざくら散るや小川の水車

雲の間の星見てゐるや杜鵑

秋色女は、江戸照降町の菓子屋の娘だつた。十三の時、上野の花見に來て、「井戸端の櫻あぶなし酒の醉。」の句を詠んで俄かに名高く

なつた。その對象になつたといふ櫻から幾代目かの樹が、今も清水堂の裏手に、秋色櫻として殘つてゐる。さる大名から俳諧のために召された時、父がその庭を拜觀したいため、下男に扮してついて行つた。歸りしなに雨が降出したので、秋色女には駕籠を下されたが、門を出ると、秋色女は父を駕籠に乘せて、自分は下男になつて、駕籠について歸つたといふ話が、名高いものになつてゐる。

すゞしさや日の落ちかゝる海の上

は、この人の佳い句といふべきであらう。

捨女は丹波柏原（かしはら）の人で、六歳の時に、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

といふ句を詠んだといふほどだが、その作風は、

うきことになれて雪間の嫁菜かな

柏原　兵庫縣氷上郡にあり。

といふ風なもので、女らしくはあるが、句としては感服されない。

この人も剃髪して、播州の網干（あぼし）に庵を結んで長生した。

凡兆の妻羽紅は、

霜やけの手をふいてやる雪まろげ

縫物や著もせでよごす五月雨

などで見ると、良妻賢母らしい。

女流俳家としては、何としても加賀の千代女が傑出してゐる。

千代女の句には女らしい優しさが生きてゐる。

蝶々や何を夢みて羽づかひ

ともし灯の用意や雛の臺所

夕顔やもののかくれて美しき

かういふ句には、どうしても男には詠まれない女性獨得の境涯が

網干　兵庫縣揖保郡にあり。

境涯

ある。併し、この優しい感情が、やゝもすると女らしい小心や、女らしい注意となる。

白菊や紅さいた手の恐しき

根をつけしをなどの慾や堇草

それがまた神經質過ぎる思ひやりともなる。

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

これは千代女の名と共に、普く知られてゐるが、どうも優し過ぎて、この優しい氣持を見て下さいといふやうな素振の見えるのが厭である。女らしく佳い所があると共に、女らしく惡い所がある。それは又女流一般の俳句といふものの缺點でもある所以なのだ。

男さへ聞かれぬものをほとゝぎす

けふばかり男を使ふ田植かな

松任　石川縣石川郡にあり。

支考　俳人。芭蕉の門人。享保十六年歿。年六十七。（一六三二五—一七三九一）其中に唯の雲ありはつしくれ　千代尼

盧元坊　俳人。延享四年歿。年五十八。（一六三五〇—一七四〇七）

此の樣に、男に對する女の位置を詠んだものも淺薄に聞える。

千代女は加賀の國松任の產で、幼少の時から句を好んだ。支考の門人の盧元坊が松任に來た時、千代女はその旅宿を訪うて、始めて教を乞うた。その時、杜鵑といふ題で苦吟して夜を徹した後、「ほとゝぎすほとゝぎすとて明けにけり。」と作つて、その才を認められたといふ話もある。子を亡くした時、

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

剃髮して妙林尼と號した時、

髮を結ふ子のひまあけて火燵かな

千代女筆

膾炙

乙二 俳人。陸奥の國、白石の人。文政六年歿。年六十九。（一四一五—一四八三）

御忌 法然上人の忌日。一月二十五日。

これなどは、いづれも人口に膾炙してゐる。人情味が強く出てゐるところが人をひきつける。

女流の俳人で最も多く佳い作を殘した人としては、私は寧ろ後代の多代女を擧げたい。

多代女は岩代の國須賀川の人、市原氏である。二十一の時壻を失つてから、乙二の門に俳諧を學び、晩年江戸に出て諸俳家と交はつた。

空にみち空にきゆるや御忌の鐘

根に雪のはきためてある椿かな

鶯や宿はともしをくばるまで

行くも來るもみな春風の堤かな

有明の野ずゑに白し春の水

客觀的

句風が一體に客觀的で、引きしまつてゐて、危げがない。これほどしつかりした句を作つた人は、嘗て女流にはない。併し、それだけ女らしい所は少しもない。

山吹やむしろの上の土人形

橋詰に小店のかゝる新樹かな

賣れ殘る市の庭木やほとゝぎす

月竝調

先鞭をつける

天保の月竝調が一世を風靡してゐた中に立つて、明治の寫生風に先鞭をつけてゐるのは、實に偉いといはねばならぬ。

生きすぎてわれも寒いぞ冬の蠅

かの女は九十歳まで生き、生前に自分の句集も出して、慶應元年に死んだ。

（荻原井泉水）

龜山天皇
第九十代。

後醍醐天皇
第九十六代。

丹生の川上
丹生川上神社をさす。官幣大社。上社は奈良縣吉野郡川上村、中社は小川村、下社は丹生村にあり。上社は高龗神、中社は罔象女神、下社は闇龗神を祀る。何れも水神。

一六　四方の海

四方の海なみをさまりてのどかなるわが日の本に春は來
にけり　　龜山天皇

世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照らし覽
るらむ　　後醍醐天皇

この里は丹生の川上ほどちかしいのらば晴れよ五月雨の
そら

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野のおくのさみだれの
ころ

後村上天皇
第九十七代。

尊良親王
後醍醐天皇の第一皇子。元弘の亂に際して、北條氏の爲に土佐に流され給ふ。延元元年金が崎に於て自刃し給ふ。御年二十七。（一九七一—一九九七）

宗良親王
後醍醐天皇の第八皇子。元弘の亂に敗れ、一時讃岐に遷され給ふ。建武中興瓦解後は東國の經略に努め給ふ。又歌に秀で給ふ。新葉和歌集の撰者。

いそぐなる秋のきぬたの音にこそ夜さむの民のこゝろを
も知れ　　後村上天皇

鳥のねにおどろかされて曉のねざめしづかに世をおもふ
かな

つかふべき人やのこるとやまふかみ松の戸ざしもなほぞ
たづねむ　　尊良親王

わがいほは土佐の山風さゆる夜に軒もる月もかげこほる
なり

君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひあるいのち
なりせば　　宗良親王

阿部野
今の大阪市の天王寺から住吉までの間にありきと云ふ野。

霜月
正平二年(二〇〇七)十一月。この時楠木正行は山名時氏を破り、ついで細川顯氏を破る。

渡邊の橋
今の大阪市天滿橋と天神橋との間にありきといふ。

四條縄手
大阪府北河内郡四條村。

兩度の合戰
譽田林の戰と阿部野の戰のこと。

一七　最後の參内

阿部野の合戰は、霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を溫め、藥を與へて創を療さしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、軈て彼の手に屬して、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲

將軍
足利尊氏。

左兵衛督
足利直義。

執事
足利幕府の職名。將軍を輔佐する役。

高武藏守師直
本姓高階氏。足利氏の世臣。執事に補せらる。正平六年(二〇一一)歿。

越後守師泰
師直の弟。正平六年歿。

淀
京都府久世郡淀町。

八幡
京都府綴喜郡八幡町。

四條中納言
藤原隆資の子。吉野朝の忠臣。正平七年男山の戰にて戰死す。年六十(一九五三—二〇一二)

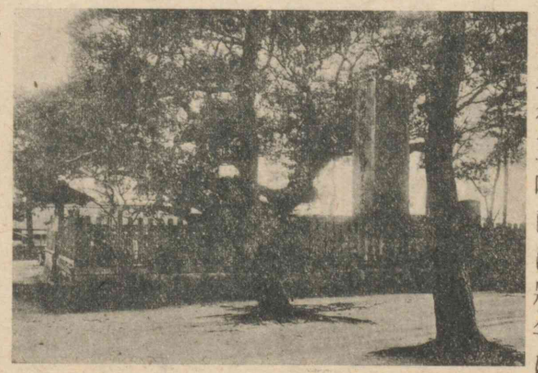
尪弱
ワウジャク。

に侵し奪はる。遠國亦蜂の起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで河内へ歸

先朝　後醍醐天皇。
宸襟
湊川　今の神戸市内にあり。
討死　延元元年五月十七日。
有待の身　凡夫無常の身。
かけ合ふ

し、『死に殘り候はむずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君の御代を鎭め參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに正行・正時、已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き、合戰を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいふかひなき謗りに落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決


楠木正行の墓

傳奏　禁中にて武家より申出づる事を傳達奏聞する役。
袖をぞ濡されける。
南殿　ナデン。紫宸殿をいふ。
進退度に當り變化機に應ず
股肱　ココウ。最も頼みとすべき輔佐の臣。

すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らむ爲に參內仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵、今、勢を盡して向ふなれば、今度の合戰、天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらむが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせむが爲なり。朕、汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけ、とかくの勅答に及ば

和田新發意
名は賢秀。楠木氏の一族。新發意は新に佛門に入りたるものの稱。

舍弟新兵衛
名は正朝。共に四條畷の戰にて戰死す。

如意輪堂
吉野山中にある淨土宗の寺。吉野朝の勅願寺。

名をぞとゞむる。
逆修
ギャクジュ。生前に死後の供養を修むること。

太平記
四十卷。花園天皇の朝より後村上天皇の朝に至る約五十年間の事件を敍述せり。作者未詳。

ず、只是を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書きつらねて、その奥に、

かへらじとかねておもへばあづさ
弓なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢髮を切りて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。

（太平記）

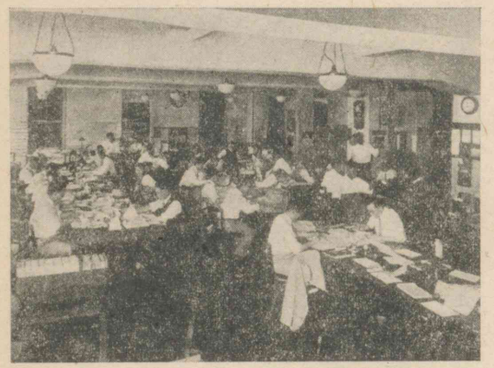
如意輪堂

一八　新聞の話

一

現代の新聞紙には、世の中がありのまゝに映る。きのふの世の中、けふの世の中、あすの世の中、それが美しければ美しく、醜くければ新聞紙もまた醜いのである。

我々は何人も自分の世界を知りたい。自分自身の姿を知りたい。この本能的の要求が有史以前から人類に鏡といふものを與へたが、新聞紙もまた全く同じ意味をもつて發達し、隨つ



編輯室

ニュース
報道。

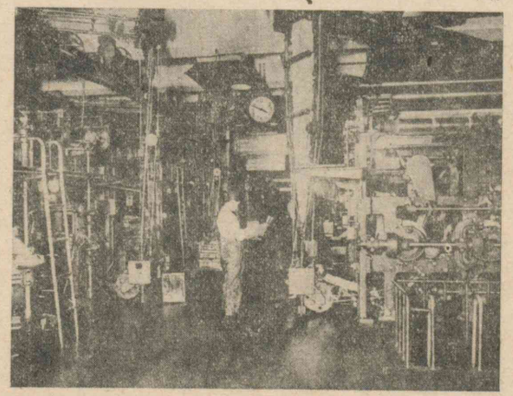
てその使命の第一義もこゝにある。

即ち、世の姿のうごき社會相のうごきをニュースとして、正しく、速く、親切に讀者に報ぜんとして、新聞社が必死の苦心をすることは、世相の鏡としての使命を完全に果さんとするに外ならぬ。讀者は、朝の新聞紙面、夕の新聞紙面、これ悉く自分自身と、その周圍との姿であることを忘れてはいけない。

二

締切時間
朝刊の締切時間及び夕刊の締切時間をいふ。

新聞社には、夜もなければ晝もない。たゞ締切時間によつて働き、締切時間によつて眠る。隨つて、いかなる深夜に新聞社を訪問



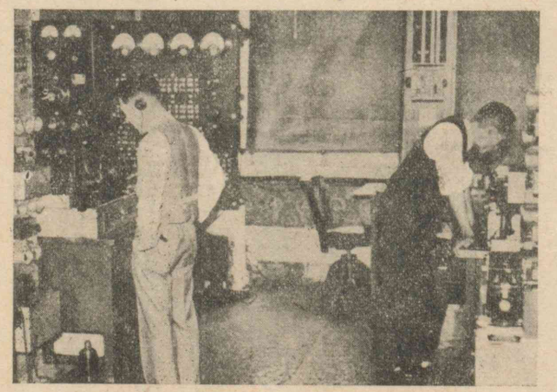
輪轉機

輪轉機
印刷機械の一種。新聞印刷等に多く使用す。

しても、決してすべての人が寢てゐたり、活動が休止されたりしてゐることはない。記者が原稿を書いてゐなければ、輪轉機が廻つてゐる。電話が使はれてゐなければ、社の中に特設されてゐる電信局の機械が、かち〳〵と鳴つてゐる。

その證據に、新聞社の電話交換手は、二名ぐらゐは徹夜してその職についてゐる。試に、午前三時なり四時なりに呼出してみても、必ず彼女たちは、元氣にそれに答へてくれるのである。

記者を乘せ、原稿を輸送し、寫眞を運び、また特殊なる新聞紙の輸送をする優秀な飛行士も、社から直通



電送寫眞

の電話機をベッドの前において、その飛行機と共に、格納庫に、常にその出動を豫想してゐる。

電送寫眞の技術者も社に宿直してゐれば、スカイーサインの技術者も泊つてゐる。鳩の訓練者も早朝の用意の爲に泊つてゐる。少し設備の完全な社になると、深夜から曉にかけて、朝の新聞配達の爲に活動する本社の遞送課員、工場技術者の外に、二百餘名の宿直員がゐるのである。

（小野賢一郎）

スカイーサイン　空中廣告。

小野賢一郎　燕子と號す。俳人。東京中央放送局文藝部長。福岡縣の人。明治二十一年生。

羅馬の一詩人　マルチアリス。（四〇—一〇四）

螫　音セキ。

上乘　よきこと。すぐれたること。

寸鐵人を刺す　人口に膾炙す

律語　音律に注意をして文字を排列したる語。

律呂　リツリヨ。支那に於ける音樂の調子。こゝにては單に口調の意。

一九　俚諺論

羅馬の一詩人が、警句を蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、軀は小さし。」と言へるは、凡ての俚諺にとは云ひ難きも、其の最も妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五音又は七音が其のおのづからなる律呂なれば、我が國の俚諺には、此の律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずば撃たれまい。」「心の鬼が身を責める。」と云ふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」「思ふ念力岩をも徹す。」「身

尾韻

抽象
チウシヤウ。

を捨ててこそ浮む瀬もあれ。」などは、七七の調子をなして、語路頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」と云ふも、其の語に律あり。右と同じ理由により、同語又は同韻を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かはれば品かはる。」「藥九層倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」と云ふが如し。

かく律語を成し、尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的に云ひなして感動の強からんことを求め、又これがため屢、誇張の言を喜ぶなども、詩歌に似たる點なり。此の故に、物の度量を云ふにも、其の數、又は量を定めて云ふを好む。「七たび捜して人を疑へ。」「人の噂も七十五日。」「あづかり物は半分の主。」などの類は數ふるに遑あらず。

好んで
好みて

定の目
ヂヤウのメ。確實なりと信ずべきものの意。

文殊
モンジュ。文殊菩薩の略。最も智慧ありと稱せらる。

まことしやか

パラドックス
そのものの中に矛盾を含みながら眞理ある語句。逆說。

深邃
シンスヰ。深くして遠きこと。こゝにては學問・議論などの深遠なる意。

數の中にても、最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目。」「三年立てば三つになる。」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。」「三人寄れば文殊の智慧。」「朝起は三文の得。」其の他なほ多かるべし。「用心は臆病にせよ。」「黑犬にくはれて灰汁の和滓に おそれる。」などは、誇張して云ふによりて其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に、深く味はふべきもの少からず。「言はぬは言ふにまさる。」「急がばまはれ。」「逢ふは別れのはじめ。」「兄弟は他人の始り。」「論語讀みの論語知らず。」「人を使ふは使はれる。」など、其の例なるべし。斯く相反する事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一

方便

恥づ

隨うて
隨ひて

特徴なり。

パラドックスと云ふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲け。」「聞いて極樂、見て地獄。」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」「長者の萬燈より貧者の一燈。」等は其の例なり。

反對のものを竝ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相竝べて、そを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、其の比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多く此の類にあり。今思ひ出づるに隨うて、其の二三の例を掲げんか。「旅は道づれ、世はなさけ。」幾たび唱するも趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」これ我が國民の以て理想を誇るに足るものの一なるべ

え言ひ出でん

道心
義理より發する心。

暗喩

睫
マツゲ。

寓言

大西 祝
文學博士。前京都帝國大學講師。岡山市に生る。明治三十三年歿。年三十七。

し。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け。」風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひ出でん。如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなれる高雅幽玄なる妙趣の浮み來ることぞ。

かく二つの事を竝べて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎。」「祕事は睫。」といふが如し。而して更にその比喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る。」「目糞、鼻糞を笑ふ。」といふ如きはこの例なり。

かく比喩の用ひやうは數種あれど、そのこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、たゞ常恆の事實として語るなり。

（大西　祝―大西博士全集）

方廣寺 京都市東山區茶屋町にあり。木像の大佛あるを以て世に大佛殿とも稱す。
毘盧遮那佛 大日如來。
法施 かうして
田舍道者

二〇 柱くゞり

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧遮那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向きにして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎兵衛・北八、ここに法施し奉りて、彌「なんと話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやねえか。あの、かうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるさうだ。あのお鼻の穴からは、人が傘をさして出られると。お後へ廻つて見よう。おや、お背中に窓があいてゐらあ。」北「あれは大方汐を吹くところだらう。」彌「鯨ぢやあるめえし。」北「おや〳〵、あれみんなが柱の穴をくゞつてゐるわ。」彌「ほんに、こいつは奇妙々々。」と、この御堂の柱の許にはちやうど人のくゞるだけ切抜きし穴あり。田舍道者ども戯れにくゞりぬける。北八も同じくくゞり、

ひよんな事 飛んだ事。

北「こりや面白い。おいらはくゞれるが、彌次さんは肥つてゐるからぬけられめえ。」彌「おれだとつてなにこれが。」と四這になつて柱の穴へ體半分程入れかけたが、一向にぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の鍔が横腹につかへて痛み、こらへ切れず。彌次郎、顏を眞赤になし、「あいたゝゝゝ。こりやひよんなことをした。」北「おや、どうした。ぬけられねえか。」彌「これ、手を引つぱつてくりや。」北「はゝゝゝゝ、こいつはをかしい。」と、彌次郎の兩手をぐつと引つぱる。彌「あいたゝゝゝ。」北「弱い男だ。ちつと辛抱すればいゝ。」彌「あとの方から足を引いてくれろ。」北「承知々々。」と、うしろへ廻り兩の足を捕へ、「やあえんさあ〳〵。」彌「あいたゝゝゝ。」北「ちつと堪へなせえ。よつぽど出かけたやうだ。やあえんさあ〳〵。」彌「あゝ待つてくれ待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。こりや、やつぱり前の方

初手 ショテ。

算段 計畫。

から引出してくれ。」といふ故、北八又前へ廻り、兩手をとらへて引く。北「やあえんさあ〳〵。それ又こつちへよつぽど出て來た。」彌「こりやたまらぬ。あいたゝゝゝ。北八これではいかぬ。初手のやうに又あとへ引戻してくれ。」北「えゝ、いろ〳〵なことをいふ。」と、又後から足を捕へ、「やあえんさあ〳〵。」彌「待て待て待て。こりやどうでも前の方から引いてもらはう。」北「えゝ、そんなに前へ廻つたり後へ廻つたり、引出しては引戻し、いつまでも果てしがねえ。こりやいい算段がある。」そばに見てゐたりし參詣の人を賴みて、北「もし、どうぞこつちからおめえ引つぱつて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。」彌「ばかあいふな。兩方から引つぱつては出る瀨がねえ。」北「出る瀨がなくても、兩方から引つばると、前へ廻つたり、後へ廻つたりする世話がなくていゝわな。」參詣の人「いや、兩方からあのさんの體を引伸ばしたら、つい出られさうなもんぢやあろぞい。」北「こりやいゝことがある。酢を一升も買つて來て、彌次さん、おめえに飲ませよう。」彌「なぜ。酢を飲むとどうする。」北「はて酢を飲むと痩せるといふことだから。」參詣の人「はゝゝゝ、そないな事いうたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ。どこぞへいて槌借つて來さんして、頭を後の方へ打込まんしたがよいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめえ。」參詣の人「されば、そこはどう

あのさん あの人。あの方。

かうさんせ かうなさい。

土砂とて來て云云
弘法大師の加持の土砂を死體にふりかくれば、硬直を和ぐと傳ふ。
一番の桶
一番大きな棺桶。
ちとべし
少しばかり。
こだはつて
つかへて。
むだ
むだ言。
いけまんせ
氣張つて元氣を出しなさい。

も請合はれんわいの。」「こりや、わしが智慧貸そわいの。何ぢやろと、あのさんのからだを和かにして、引出すがよかろさかい、かうさんせ。土砂とて來てかけさんせいの。」田舍者「すんだら土砂のうぶつかけずと、一番の桶さあ買つてきなさろ。手足をちとべし、をん曲げたら入るべいのし。」彌「えゝ、いめえましい事をいふ。むだどころぢやあねえ。北八、早くどうぞしてくれぬか。」北「待ちなよ。ははあ、おめえ脇差の鍔が横腹へこだはつて、いてえのだ。」と、手を差入れてひねくり廻し、やう〳〵脇差をぬいて取る。彌「いかさま、これでどうかくつろぎがあるやうだ。」北「どれ〳〵、いや、時にどなたぞ前の方から押出して下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引出しますから。やあえんさあ〳〵。」參詣の人「それ出るわいの。まちつとぢや、いけまんせ。」彌「あゝうゝゝゝ。いてえ〳〵。」北「しめたぞ。えんやあ〳〵。そりや出たぞ〳〵。」と、やう〳〵の事にて引出せば、彌次郎は大汗をふき〳〵、ほつと溜息つきながら、「やれ〳〵ありがてえ。こりやどなたも御苦勞でございやした。これ、著物が擦り切れて、あばら骨が今にぴり〳〵する。」

傘さして出るお鼻よりはしらなるあなおそろしや身をすぼめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮華王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見む三十三間堂のながさを

（十返舍一九―東海道中膝栗毛）

此の世をばどりやおいとまにせん香の煙とともに灰さやうなら（一九）

蓮華王院
大佛殿の南。蓮華王院は寺の名。本堂は有名なる三十三間堂。
五重の塔
京都市下京區九條町にある塔。
十返舍一九
本名重田貞一。戯作者。江戸に住す。天保二年歿。年六十七。（一四二五―二四九一）

有王　俊寛の召使たりし者。
二人　丹波少將藤原成經、平判官康頼。
今一人　俊寛をさす。
なりにけるこそ　うたてけれ　不憐にして　フビンにして。可愛がつて。
六波羅　京都市賀茂川の東。五條七條の間。平家の一門の邸ありし所。
忍うで　忍びて

二　有王島下り

さるほどに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。

僧都の稚うより不憐にして召使はれける童、あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行向つて見けれども、我が主は見え給はず。「如何に。」と問へば、「それはなほ罪深しとて一人島に殘されぬ。」と聞いて心憂しなども愚なり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍うでおはしける處へ參りて、「この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は如何にもして彼の島へ渡つて、御行方をも尋ね參らせばやと存じ候。御文賜はつて候はむ。」と申しければ、姫御前なのめならずに悦び、やがて書いてぞ賜びてける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月・五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけむ、三月の末に都を立つて、多くの波路を凌ぎつつ、薩摩潟へぞ下りける。薩摩より彼の島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、著たる物を剝取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじと、元結の中には隱しける。

さて商人船に乘つて、件の島へ渡つて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人はあれども、言ふ詞をも聞知らず。有王、島の者に行向つて、「物申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。」と

姫御前　ヒメゴゼ。
唐船　モロコシブネ。支那と通商する船。
遲くや思ひけむ。
薩摩潟　薩摩（鹿兒島縣）南方の海洋。
法勝寺　ホフショウジ。京都市岡崎にありし天台宗の寺。
執行　シュギャウ。寺社にある役僧。上首として諸務を執行す。

知りたらばこそ。返事はせめいさとよ

白雲云々 和漢朗詠集、紀齊名の作による。

沙頭云々 和漢朗詠集、大江朝綱の作による。

問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振りて「知らぬ。」といふ。その中に或者が心得て「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそこゝと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず。」とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峰に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋んで往來の道もさだかならず。晴嵐夢を破つては、その面影も見えざりけり。山にては遂に尋ねも遇はず、海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。

仏寛と有王

蜻蛉 カゲロフ。昆蟲類中の蜻蛉科に屬す。トンボに似て形小し。

空樣 上の方。

繼目 關節のこと。

ゆたひ 肉が落ちて皮のたるむこと。

もらうて もらひて

乞丐人 コツガイニン。乞食。

ある朝、磯の方より蜻蛉なんどの如くに痩衰へたる者、よろぼひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髮は空樣に生ひあがり、萬の藻屑取りつけて、荆棘を戴いたるが如し。繼目あらはれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹布のわきも見えず、片手には荒海布を持ち、片手には魚をもらうて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろ〳〵としてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。

はや、かれもこれも次第に歩み近づく。若しかやうの者にても我が主の御行方や知つたると、「物申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給

やがて
波路を凌ぐ

神妙

ふべきなれば、「これこそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄てて沙の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知つてけれ。

僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上にかき乗せ奉り、「多くの波路を凌ぎつゝ、遙々これまで尋ね參りたるかひもなく、如何に、やがて憂目を見せむとはせさせ給ひ候ぞ。」と、さめ〴〵とかき口説きければ、僧都少しく人心地出で來、扶け起され、「誠に汝、多くの波路を凌ぎつゝ、遙々とこれまで參つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮れても、都の事のみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影を夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたう疲れ弱つて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たるをもたゞ夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。」有王、「こは現

去年
治承二年。
少將
成經を指す。
判官入道
康頼を指す。
九國
九州。

にて候なり。さてもこの御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。」と申しければ、「いさとよ、これは去年少將や判官入道が迎への時、その瀨に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚に若しやと賴みつゝ、永らへむとはせしかども、此の島には人の食物も絶えてなき處なれば、身に力のありしほどは、山に登つて硫黃といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず、かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人、釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。これにて何事をもいはばやとは思へども、いざ、我が家へ。」と宣へば、有王あの御有樣にても家を

より竹　波に漂ひて濱邊に漂ひ來れる竹。
溜るべうも　溜るべくも
西八條　清盛の邸をさす。
官人　クワンニン。檢非違使廳の役人。
追捕　ツヰブ。官に沒收すること。
北の方　貴人の妻。こゝにては後寬の妻をさす。
鞍馬　京都府愛宕郡。京都市の北方。

持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け參らせ、教に從ひて行くほどに、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆をゆひて桁・梁に渡し、上にも下にも、松の葉ひしと取懸けたれば、雨風溜るべうも見えざりけり。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、「去年少將や判官入道迎への時も、これらが文といふ事もなし。今又、汝が便りにもかくとも言はざりけりな。」と宣へば、有王涙に咽び、うつ伏して、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて起上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參りて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隱しかね參らさせ給ひて、鞍馬の奥に忍うで御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々參りて御宮仕り候なれ。

具す
瘡　モカサ。天然痘のこと。

いづれも御歎の愚なる方は候はねども、中にも稚き人は、餘りに戀ひ參らせ給ひて、參り候度毎に、『如何に有王よ。我を鬼界が島とかやへ具して參れ。』と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、瘡と申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は、其の御歎と申し、又此の御事と申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍うでおはしけれ。それより御文賜はつて參りて候。」とて、取出でて奉る。僧都これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや三人流されおはします人の、二人は召還されて候に、何とて一人殘されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身ほどいふかひなきことは候はず。男の身にて候は

はかなさ
とりとめのなきこと。
人にも見え
人の妻となること。
人の親云々
後撰和歌集、藤原兼輔の作に、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな。」とあるによる。
蟬の聲云々
和漢朗詠集、李嘉祐の作による。麥秋は陰曆四月をいふ。
白月・黑月
ビヤクゲツ・コクゲツ。白月は滿月。黑月は晦の月。

ば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね參らで候べき。この童を御供にて急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王よ。この子が文の書きやうのはかなさよ。『おのれを供にて急ぎ上れ。』と書きたることのうらめしさよ。後寛が心にまかせたるうき身ならば、何とて此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これほどにはかなくては、いかでか人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべきか。」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。「この島へ流されて後は、暦もなければ月日の立つをも知らず、只自ら花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き

ござんなれ
こそあるなれの轉。
西八條云々
治承元年、平氏討滅の謀露れ西八條の邸に召されし時のことをいふ。
心苦し
氣がかりなり。おのれ
彌陀の名號
ミダのミヤウガウ。阿彌陀佛の名號。
臨終正念
リンジユウシヤウネン。命の終るに臨んで、心亂れず正しき意。
荼毗
ダビ。梵語、火葬の意。

者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かむと慕ひしを、やがて還らむずるぞと慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りとだにも思はましかば、今暫くもなどか見ざらむ。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば、歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて、おのれに憂き目を見せむも、我が身ながらつれなかるべし。」とて食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡つて二十三日と申すに、僧都庵の中にて遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王、空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、やがてふしどを改めず、庵を切りかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取懸けて、藻鹽の煙と爲し奉り、荼毗事をへぬれば、白骨

なか〳〵
生々世々
他生
今生に對し、今生以外の他の世界をいふ。
曠劫
クワウゴウ。きはめて長き時間。
法華寺
眞言律宗の寺。奈良市法華寺町にあり。
七道
東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。
平家物語
流布本は十二卷なれど、異本多くして卷數一定せず。平氏の勃興より滅亡に至るまでを敍述す。作者未詳。

を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて九國の地にぞ著きにける。

それより僧都の御女の忍うでおはしける御許に參つて、ありし樣を始めより細々と語り申す。「なか〳〵文を御覽じてこそ、いとど御思は增さらせ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙もなければ、御返事にも及ばず、思し召されつる御事どもは、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき。たゞ如何にもして御菩提を弔ひ參らせ給へ。」と申しければ、姫御前聞きもあへ給はず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納め、法師になりて、諸國七道修行して主の後世をぞ弔ひける。（平家物語）

三　東海道の歌

東海道の旅といへば、昔から一番往來のしげきところ、今日では鐵道の線路となつて、昔日の街道とは多少途中の違ふ所もあるが、旅客も多く、最も一般的なものになつてゐるから、この日本國の大通りともいふべき東海道でよまれた古人の歌に就いて話して見よう。

汽車が東京を離れてから、先づ大きな都會は横濱である。横濱は、維新近くまでは唯の漁村に過ぎなかつた處であるから、勿論古く歌に詠まれる筈はない。しかし、こゝに面白い歌が一つあるから、それを紹介しよう。

日のもとのあづまのみやこを志して使に參りし頃、武藏

おもしろう。
おもしろく

ペリー　米國の提督。嘉永六年米國の使節として我が國に來りて開國通商を請ひ、安政元年再び來りて和親條約を結べり。（一七九四―一八五八）

機智

の國横濱の浦といふ所に船の碇をおろして日數經るほどに、おの〳〵旅のつれ〴〵慰めむとて、船の上につどひゐて、酒のみ遊びけるに、日も暮れて月のいとおもしろうさし出でたりければ、戯れにその國のしらべをうたふ。

彼理

むさしの海さし出づる月は天飛ぶやかりほるにやに殘る影かも

「彼理」といふのはペリーの事である。勿論これは、ペリーの作ではない。幕末の偉人佐久間象山の戯作である。「天とぶや雁」といふ萬葉集の歌に用ひてある枕詞を、そのまゝカリフォルニヤにかけて使つたのは、新味に富んでゐて、この作者の機智の程が窺はれる。

狩野芳崖　畫家。明治二十一年歿。年六十一。

廣重　安藤氏。江戸末期の浮世繪師。安政五年歿。年六十二。（二四五七―二五一八）

木の間〳〵に云云　「富士の嶺を木の間木の間にかへり見て松の蔭ふむ浮島が原。」とあるによる。

沼津を過ぎれば、視界の焦點は、どうしても東海の靈山たる富士山の上に來なければならない。富士山を詠んだ歌は、萬葉集以來數々あるが、その中で、下から見上げた作には、明治畫壇の巨匠狩野芳崖の作に、

うつくしくあやにたへなりかしこくも神のつくれる我が
おほみ山

といふのがある。さすがに畫家の詠だけに、感じが違つてゐる。笠をかぶつた昔の旅人が、富士の眞下なる松並木のかげを、富士をかへりみがちにゆく姿は、まさしく廣重の畫である。香川景樹の有名な「木の間〳〵にかへり見て」の歌も思ひ出される。少しすゝむと、もう興津である。この邊は、東海道中でも風景絶佳の地であつて、昔から旅人はこゝで心を引きとめられる。

庵原　イホハラ。現今はイハラとよぶ。靜岡縣の一郡。

宇津の山　靜岡縣安倍・志太兩郡の境にある山。宇津谷峠と稱す。

庵原の清見がさきに朝晴れて富士は秋こそ見るべかりけれ　上田秋成

明朗高潔なる富士山が、澄み切つた空に聳えてゐる景は、實に秋がよい。

靜岡を過ぎてやがて宇津の山にかゝる。この峠は、今こそ何分とかゝらずに隧道を拔け終るけれども、昔時にあつては相當に骨の折れる峠であつた。

汽車は遠江にはひつてゐる。このあたりは丘陵がうち續いてのびてゐる。その間をかけ拔けてゆくと、忽ち天龍川である。一走りすると、もう濱名湖である。

旅にして誰にかたらむとほつあふみいなさ細江のはるのあけぼの　香川景樹

引佐　イナサ。

沿うて　沿ひて

かのわたりを引佐郡といひ、湖岸にいくつもの細い入江があるので、いなさ細江と古くからいはれてをる。この細江は、今では蔭の名產地となつてゐる。

名古屋を過ぎて幾程も無く汽車は岐阜に著く。この市の北を流れるのは長良川である。この川は昔から鵜飼に依つて知られてゐる。暗い夜に篝火を焚いて、流に沿うて下つて來る鵜舟の哀趣は、芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな。」の一句に盡きてゐる。歌では、香川景樹に、

雨は止み雲まだ霽れぬ夕やみのそらまちいでてさす鵜舟かな

の作がある。

琵琶湖を車窓の右に眺めつゝ行くと、早くも大津に來る。長等

俊成
藤原俊成。歌人。千載和歌集の撰者。元久元年歿。年九十一。(一七七四—一八六四)

平忠度
武將。忠盛の子。壽永三年歿。年四十一。(一八〇四—一八四四)
さゞなみや云々
千載和歌集にあり。

めさね。

山が見える。平家の都落の際、夜にまぎれて五條三位俊成の門をたゝいて、歌稿を託したといふ平忠度の歌は、謠曲の題材ともなつてをる。

さゞなみや志賀の都は荒れにしをむかしながらの山櫻かな

そのかみの街道のさまを思はせる歌に、

雨ふれば泥ふみなづむ大津みちわれに馬ありめさねたびびと

橘曙覽

といふのがある。馬方のいうた詞を其のまゝ歌にしたのである。又、この邊は車をひく牛が多かつたので、それを見て、大隈言道のよんだ面白い歌がある。

初に來て大津の大路けふみればよくも牛にはうまれざりけり

逢坂山
滋賀縣大津市にあり。

淵叢
エンソウ。

汽車は逢坂山を拔けて、やがて京都に入る。京都は平安京として文化の淵叢の地であつたから、こゝで詠まれた歌の數は限りもない。しかし京都市中で誰もが第一に京都らしく感じるのは、あの賀茂川の流であらう。

かへるべく夜はふけたれど賀茂川の瀨の音はたかく月はさやけし

これも香川景樹の歌であるが、あの柳のゆらぐ岸のほとり、瀨の音の清い河原は、如何にも京らしい感じをそゝる。その川のあたり近く歩みをはこぶと、川瀨の音に旅の疲れも心地よくをさまるであらう。

上田・松井　文學博士、東京帝國大學名譽教授、上田萬年。（昭和十二年歿）文學博士、東京文理科大學名譽教授、松井簡治。

心祝　心ばかりの祝。

今や云々　大正四年に當る。

二三　學術の意義

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで、人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今やその第一卷がいよ〳〵出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日

工程　仕事の道程。

カード　こゝにては採集語を誌す用紙。

逝いて　逝きて

捗の行かぬ

松井君の邸　東京市小石川區關口駒井町。

本の國勢を一變せしめた。政治や、軍事や、工業や、貿易の進步發展の跡を見ても、その間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業は、かういふ中に徐々とその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬といふ古語や新語は、幾百部幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理される。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ春も逝いて、暦も幾度か改まる。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば捗の行かぬことは齒痒いやうで、いつ方のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を

ぢみ

拮据 忙しく働く形容。

冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦とは、間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、捨てるものは捨て、その進捗は遲いが、その成果は確實であつた。かくて粒粒積上げた砂子も、遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は、幾隻となく進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たびその室に入つて山なす材料を見上げるものは、何人もその難事業たることを承認せずには居られぬ。また編纂者の決心と根氣とを尊敬せずには居られぬ。さうして、それが決して學者の閑事業ではなくして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絕大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。

緊急 必要に迫ること。

文物 文化の生産物。

文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。また精神界を支

堅忍不拔 がまんづよく、ぐらつかぬこと。

一種の強因

沒交渉

紛糾 みだれもつれる。

配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民にとりての立派な強みになる。この一大產物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は、國語界に於ても、また無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と沒交涉のものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進步して行く世間を一日も餘所に見て居るわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居る、それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は、紛糾した全社會と常に相往來して居るのである。

大白 大いなるさかづき。

幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅とを察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待暮らした同友と共に、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。

（芳賀矢一―大日本國語辭典の序）

日の本の國のすがたを人とはばさして答へむ富士の神山

（芳賀矢一）

ウェストケンシントン　ロンドン西區テームス河の南にある地名。
古典的　クリサンセマム「菊」の義。
洒落者　シャレモノ。
胎生　タイセイ。

自修文

一　言葉の上の喜劇

ウェストケンシントンをウェストケンシントンと發音しては、英國人には通じない。「上杉謙信殿」といふ方が、よりよく通用するとは、誰が言ひ出したことか知らぬが、今日では、もはや一種の古典的な傳說となつてゐる。クリサンセマムは、日本語である「禁裡さんの紋」であると言ひ出した洒落者もゐる世の中である。これくらゐの傳說の胎生は、決して異とするに當るまい。

たしか今某大學の講師をしてゐられるU氏であつたと記憶するが、倫敦で或るレストランに立寄つて、鮭に胡瓜をあしらつた料

傍證

理を他人が食べてゐるのに、食指頓に動き、鮭はサモン、胡瓜はキューカンバーと、型の如く發音したが、一向にそれが給仕に通じない。困り果てたが、氏の食慾は語學の上に超越して、頻りに口のなかに唾液を分泌させる。聽耳を立てて、懸命に客人の云ふことに氣をつけてゐると、どうも「サルモ-キューカ」と響いて來る。必要は發明の母である。氏は遙々日本を離れて、倫敦の空で、サモン-キューカンバーと辭書の教へてゐるところは、實は「猿も休暇」であらねばならぬことを學び知つた。そこで早速「猿も休暇」とやつてのけると、給仕はすぐ心得顏に、鮭と胡瓜との料理を運んで來たといふ。かうなると「上杉謙信殿」も、決して馬鹿にしたものではない。それは單なる傳說以上の或るものであり得るといふ傍證を獲得したわけである。

オックスフォードに滯在してゐた時のことである。或日友達が、至極眞面目な顔をして、

「こちらの者は、話をしてゐるときに、よくボーン、ボーンと云ふぢやないか。一體あれはどういふ意味だい。」

と言ひ出した。自分はすつかり面喰つてしまつた。自分は英國の土地を蹈んで既に半歳になつてゐたが、不幸にして未だ嘗てその「ボーン」を耳にするの光榮を有しなかつたからである。しかし自分と殆ど同じ環境のうちに生活してゐる友達が、麥酒の栓をぬくやうな這般の怪音を屢耳にするといふ以上、自分の耳にもこれを受入れつゝあるに違ひないと思つて、いろ〳〵考へた末、やつとそれが他人の言つたことを聽返すときに、英人の口からよく漏れる「バードン」であることに想到して、これある哉と、覺えず手を拍つ

這般

想到

徒然草に云々「樫尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、『あしあし』といひければ、上人立ちどまりて、『あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊くおぼゆるは』と、たづね給ひければ、『府生殿の御馬に候ふ』と答へけり。『こはめでたきことかな。阿字本不生にそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな』とて感涙をのごはれけるとぞ。」

ジグムンドーフロイド　オーストリヤの精神分析學者。（一八五六―）

たことである。

徒然草に、賤しい男が馬の脚を洗つてやるとて「脚、脚」と云つてゐるのを、通りかゝつたお坊さんが「阿字」と聽違へて、その男の佛心に感涙を催した由が書いてあるのは、誰でも知つてゐるところであらう。自分はこの條を讀むたびに、ジグムンドーフロイド博士などに話して聽かせたら、屹度精神分析學の好個の研究材料だと面を輝やかすだらうと想像するのであるが、バードンをボーンと聽き誤つてゐる友達を、この新鋭な心理學の研究臺に上せたら、どんな心的錯綜の結果といふことになるだらう。斷つて置くが、この友達は、決して麥酒の栓をぬく音に執著する程の酒呑みではない。

しかしこんなことで、友達の耳を笑ふ權利は、自分には少しもない。嚴密な意味で同一の範疇に入れることの出來る言葉の上の

フリードリッヒ大王　普魯西王フリードリッヒ二世。（一七四〇―一七八六）

喜劇を、自分も體驗してゐる。巴里の或小劇場で、座席についてゐると、後の方で頻りに「ボカーン」「ボカーン」と叫ぶ聲がする。貧弱な自分の佛蘭西語の知識を以てしても、「ボカーン」は變である。驚き怪んで聲のする方をよく見ると、雪白の前掛をかけた賣子たちが、芝居の番組を呼び賣りしてゐるのであつた。で、自分も座を起つて、謹んで一枚の「ボカーン」を買込んだことであつた。

聞違へのほかに、意味の取違へがあつて、言葉の上の喜劇が一層多樣になる。誰でも知つてゐる話ではあるが、フリードリッヒ大王は、近衞兵に新顏がはひると、きまつて第一に年齡を尋ね、次に入營してからの日數を問ひ、終りに給金と待遇とに滿足してゐるかと聞くのであつた。或時少しも獨逸語を解せぬ一人の佛蘭西人が、近衞隊に入ることになつた。彼は、大王の質問に應ずべく、お定

慣例

まりの順序に應じて返答の出來るだけの言葉を諳誦して置いた。ところがどうしたのか、大王は、いつもの慣例を破つて、眞先に、

「入營してから何日になる。」

と尋ねた。新兵はこゝぞとばかり、

「二十一年です。」

としやちこばつて答へる。大王は驚いて、

「なに！そしてお前はいくつだ。」

「一歲です。」

と、新兵は得意である。大王はあきれ顏に、

「何だと？こりや、朕かお前かが氣が違つたらしいぞ。」

と叫ぶと、新兵は澄まして、

「どちらも。」

無鐵砲

とやつてのけた。

東北出身の某代議士は、桑港に著いて、ホテルから電話をかける時、頻りに「イフ、イフ」と叫んで、對手を面喰はせたさうである。故國で電話をかける時の「もし、もし」の役を、「イフ、イフ」に勤めさせようといふのである。しかしこの無鐵砲な直譯も、決してその仲間を有しないといふ譯ではない。そゝつかしい或男が、西洋人の足に水を注ぎかけて、平あやまりにあやまつたはいゝが、それが却つて對手を一層怒らせてしまつた。仔細はその粗忽者が、「サンキュー」を連發したからである。なるほど水をかけられた上に「有難う」を繰返へされては、對手が不興がるのも無理はない。しかし「サンキュー」を「多謝す」と覺え込んだ御當人は、心からおのれの粗忽を陳謝してゐるのであつた。

血眼になる

アインガング「入口」の義。

作爲譚

ベルリンで古本探しに血眼になつてゐた頃、こんな話を聞かされた。どこかの官省から派遣された一人のお役人が、宿に落ちつくとすぐ散歩に出るとて、同伴の一人に、

「宿の名を忘れると大變だぞ。この旅館は……。」

と、街路に出たところで、振り仰ぐと、「アインガング」とある。

「さうか、ホテル-アインガングか。これで迷子になる心配はないぞ。」

と得意さうな顏をしたと。

自分はこの話を信じなかつた。いづれかうしたことに興味を持つ或茶目の作爲譚に過ぎないだらうと思つてゐた。ところが、幸か不幸か、巴里でこれと全く同じ言葉の上の喜劇が、實際自分の眼の前で、展開したのであつた。餘り親しくはないが、日本人同志

松村武雄
文學博士。神話學者。熊本縣の人。明治十六年生。

といふわけで、たまに市内散策を共にしてゐた某氏、地下鐵道の或停車場から出るなり、

「歸りにも、こゝから乘るから、停車場の名を覺えていかう。」

と後をふり仰いで、

「あゝ、ソルティといふのか。」

と呟いた。奚ぞ知らん、「ソルティ」は「出口」に過ぎなかつたのである。

（松村武雄―朗かな斜視）

甕に片口味噌擂るな。　　龜井・片岡・伊勢・駿河。

猫に小判。　　下戸に御飯。

玄關に席を改めて口上を聞く。　　林間に酒を暖めて紅葉を焚く。

名だたる

田子の浦
靜岡縣庵原郡蒲原町の海岸一帶の稱。

樗牛
高山林次郎の號。文學博士。明治三十五年歿。年三十二。

廣重
歌川廣重。本姓安藤氏。德川末期に於ける浮世繪風景の版畫家。

興津川
靜岡縣德間山に發し駿河灣に注ぐ。

二　銀翼を輝かして

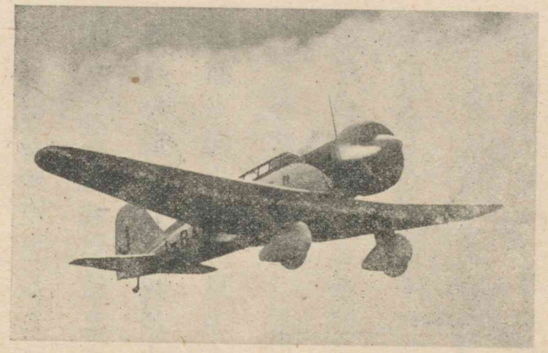
東海道の空を旅して眼を悅ばすのは、名だたる海と灣と大河と湖水とが、錯綜連續して釀し出す風光の變化である。東京灣は數個のお臺場で單純が破られてゐる。駿河灣に於ては、赤人の田子の浦も樗牛の清見寺も廣重の興津川も、二千米以上の上空からは全くわからない。三保の松原に於ても、上から見ては關西人の所謂けつたい極まる形に過ぎない。しかし、駿河灣の中でも、沼津から灣入した七浦や三津（みと）のあたり、殊にお椀をふせたやうな淡島あたりの眺は、上から見ても優れた日本畫を見るやうだ。

遠江灘や伊勢灣も海岸傳ひに飛んで行けば、たゞ水の色、波の形の美しさに心を奪はれるだけである。これは、太平洋沿岸に限ら

俯瞰　フカン。

セザンヌ　フランスの畫家。（一八三九―一九〇六）

ず、荒波で有名な日本海でもさうであるが、機が難航でない限り、日本の本土の海岸の上を飛ぶほど、安易な氣持を與へられることは、恐らく他にあるまい。潮流の工合により、海の水が岸近くと沖とで青と碧とに變り、風が吹けば、薄の穂のやうに青海原に波頭が白く出揃ふ。



快翔

越後の親不知の斷崖から直江津にかけての海岸の俯瞰も、亦忘れ難いものの一つである。冬の日は知らず、このあたりの夏の海は春の海といひたい程の穩やかさで、海岸の屈折と斷崖との趣は、どの一片を切りとつても立派な風景畫だ。セ

河床

水瀨

ザンヌなどが好んで描きさうな明るい黄綠と青との油繪だ。僕がこの邊を飛んだ日は、殊に靜かな朝であつた。油の如く平滑な海面には、機影が水鳥の如く寫つた。佐渡が島は、水煙の中にぼんやりと浮んでゐた。

飛行機から僕の觀た河の中で、東海道では木曾川・天龍川、其の他二三の小川を除けば、富士・大井、その他の大河は、海近くなると實に美しい形相を示してゐる。河床は何尾かの鮫か鮃（ひらめ）かが腹を見せてゐるとでもいはうか、或はハムの切れを皿に盛つて出したやうだといはうか。かうした形容は、何れにしても綺麗ではないが、實際は飛行機から觀た地上の景色の中では、最も美しいものの一つである。殊に、海岸近い川の淺瀨には、綠の藻が幾かたまりにもなつて、水瀨のせゝらぎにゆら〳〵と搖れて、風に搖られる蓮の花の

凄寥 セイレウ。

女人群像

やうな美觀を呈してゐる。

琵琶湖　池田遙村畫

湖では、琵琶湖の優婉、濱名湖の明快、野尻湖の凄寥がある。二千米位の高度では、琵琶湖は二分の一も全觀出來なかつた。この大湖を取卷く諸山は女人群像とでもいひたいほどもの優しい。僕は、この湖では、大津の街が湖岸へこぼれ落ちるやうに擴がつてゐる景氣のよさが好きだ。いかにも、大湖が生んだ市といふ姿である。

濱名湖は、端から端までその上を飛んで、小半島・小灣・小入江が多

一癖ありげな山

清澄 セイチョウ。

生憎

くて、まるでバルカンの縮圖でも見るやうな興味が涌く。海に接してどこまでも明るく陽氣である。野尻湖は、芙蓉湖といふ別名もあるといふが、空から見るとなるほどとうなづかれる。この湖の日本海寄りに、黑姫・飯繩・妙高など一癖ありげな山が聳立してゐるのが、自然凄味を與へてゐるのだらうが、一つは、その三十數米もあるといふ水深のせゐもあるに違ひない。湖底には、この湖水發生前の大森林が、その儘白骨の林となつて、今でも天氣清澄の日は、水面から覗かれるといはれてゐるが、僕の飛行した時は、生憎附近は薄曇りで、それを見ることが出來なかつた。僕はそれを見る爲に、もう一度あの附近を飛びたいと思つてゐる。

（鈴木文史朗―空の旅地の旅）

賴家　源賴朝の子。元久元年歿。年二十三。（一八四二―一八六四）

修禪寺　眞言宗。一名桂谷山寺。靜岡縣田方郡修善寺町にあり。

三　夜叉王

人物　面作師　夜叉王　源左金吾賴家

夜叉王の娘　桂　下田五郎景安

同　楓　修禪寺の僧

時　元久元年七月十八日

所　伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其のうしろは畑を隔てて塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲けり。

夜叉王は屋内にて、楓は門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧

疎相　ソサウ。そこつ。

一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源賴家卿（二十三歲）、後より下田五郎景安（十七八歲）賴家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませぬぞ。

楓は、はつと平伏す。賴家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

賴家は緣に腰を掛ける。

夜叉　して、御用の趣は。

賴家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召し出し、賴家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣しておいたるに、日を經れども出來せず、幾度か延引を申立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

丹精を凝らす

懈怠 ケタイ。

棟梁 トウリヤウ。一家又は一國の重鎭。

いかでか 等閑 なほざり。

五郎　多寡が面一つの細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

賴家　予は生れ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣すこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござります。勿體なくも、征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一つも

夜叉 梵語。人を害する惡鬼をいふ。

羅刹 ラセツ。梵語。人を食ふといふ黑身・綠眼・赤髮の惡鬼の名。

五體 全身。

無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜叉　其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事かはりて、これは、生無き粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打込む面作師。五體にみなぎる精力が、兩の腕に自ら湊る時、我がたましひは流るゝごとく彼に通ひて、始めて面も作れまする。たゞし、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、われながら確とは

三島神社の放し鰻
癇癖 カンペキ。かんしゃく。
冥利 ミャウリ。神佛の加護。
いうて いひて

わかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上様御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取り止の無い事ばかり申上げてゐたら、御癇癖が愈〻募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはなう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは如何にも無念ぢや。

賴家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも早急に出來ぬといふのか。

夜叉　恐れながら早急には……。

賴家　むゝ、おのれ覺悟せい。

癇癖募りし賴家は、五郎の捧げたる太刀引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出づ。

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう父様。

夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

凡夫

頼家　えゝ、おのれ前後不揃のことを申立てて、予をあざむかうでな。

桂　いえ〳〵、嘘僞（うそいつはり）ではござりませぬ。面は確かに出來して居りまする。これ父様もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。ゆふべ漸く出來したといふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上様に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う〳〵。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂は受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家は無言にて少しく心解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあぐ。

頼家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上様御顏に生寫しぢや。

頼家　むゝ。

飽かず打まもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝ。

めがね　物の善惡・可否を見定むること。

夜叉王、容を改めて、

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致し方もござりませぬ。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は、憚りながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來、數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打ち直しても生きたる色なく、たましひも無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

怨靈　うらみて死せしものの　たましひ。

怪異　妖怪。

重疊　チョウデフ。

かなうた

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではありませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異なんどのたぐひ…。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。

賴家　むゝ、とにもかくにも此の面は賴家の意にかなうた。持歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

賴家　おゝ所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、賴家にさゝぐ。賴家立つ。

五郎も立つ。桂、共に庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安心いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家　行きかゝりて物につまづく。

賴家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はぢつと思案の體なり。

楓　父様、お見送りを……。

夜叉王、始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

賴家等相前後して出て行く。夜叉王は起ち上りてしばし默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取

縋る。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　切羽（せっぱ）詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑をのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

切羽詰る
悔んでも
悔みても

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。

夜叉　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したを、さ程無念と思し召さば、これから愈、

精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は縋りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑づ。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。

（岡本綺堂　修禪寺物語）

岡本綺堂
名は敬二。劇作家。東京の人。昭和十四年歿。年六十八。

主要宛字表

おぼつかなし　かひ　きつと　さすが　しまふ　せつかく　だけ　だめ　ちやうど　ちよつと　でたらめ

覺束なし　甲斐　屹度　流石。遉　仕舞ふ　折角　丈　駄目　丁度　一寸。鳥度　出鱈目

とかく　とにかく　なか〳〵　ふるまひ　はかなし　むだ　むづかし　やたら　やはり

兎角。左右　兎に角　却々　振舞　果敢なし　無駄　六ケし　矢鱈　矢張

類字表

溢　イツ。　あふる。

縊　エイ。　くびる。

隘　アイ。　せまし。

謚　エキ。　笑ふさま。

辯 ベン。—舌。—護。
贏 エイ。かつ。
臆 オク。—病。
己 キ。コ。おのれ。
檢 ケン。—査。
肅 シユク。つゝしむ。
戌 ジュツ。いぬ。
衰 スヰ。よわる。
拆 セキ。わかつ。
徵 チョウ。めす。
釣 テウ。つる。
博 ハク。ひろし。
偏 ヘン。ひさへに。かたよる。
喩 ユ。さとす。
緣 リョク。みどり。
祿 ロク。官—。
毆 オウ。—打。

辨 ベン。—當。—天。
贏 ルヰ。よわし。
憶 オク。記—。
已 イ。すでに。
險 ケン。—阻。
蕭 セウ。さびし。
戌 ジュ。まもる。
衰 アイ。あはれ。
拆 タク。ひやうしぎ。
徽 キ。はた。のぼり。
釣 キン。ひとし。
搏 ハク。うつ。
偏 ヘン。あまねし。
愉 ユ。たのしむ。
緣 ヱン。ゆかり。
錄 ロク。記—。
歐 オウ。—洲。

辯 ベン。—髮。
贏 エイ。地名。
億 オク。—兆。
巳 シ。み。
撿 ケン。—按。
簫 セウ。(樂器の名)
戊 ボ。つちのえ。
衰 チウ。まごころ。
折 セツ。をる。
懲 チョウ。こらす。
鈎 コウ。かぎ。つりばり。
搏 タン。セン。にぎる。
遍 ヘン。あまねし。
偸 トウ。ぬすむ。
椽 テン。たるき。
碌 ロク。—青。

辮 ベン。花—。

緘 カン。封—。
筋 キン。すぢ。
羈 キ。—旅。
祇 キ。ギ。神—。
款 クワン。まこと。
遣 ケン。やる。
卿 ケイ。キヤウ。—相。公—。
堅 ケン。かたし。
裁 サイ。—縫。
炙 シヤ。セキ。あぶる。したしむ。
鍾 ショウ。—馗。
萩 シウ。はぎ。
飾 ショク。裝—。
戎 ジウ。—衣。
籍 セキ。書—。戶—。
選 セン。サン。—擧。
戴 タイ。いただく。

鍼 シン。指—。
筋 ジョ。箸に同じ。
羈 キ。—絆。
祇 シ。—候。
欵 アイ。あゝ。歎聲のさま。
遺 キ。のこす。
鄉 ガウ。キヤウ。—社。—土。
豎 ジュ。童子。
栽 サイ。—培。
灸 キウ。やいと。
鐘 ショウ。—銘。
荻 テキ。をぎ。
飭 チョク。戒—。
戒 カイ。—具。
藉 セキ。慰—。狼—。
撰 セン。サン。—著。
載 サイ。のす。

陶 タウ。—器。
段 グン。—落。
低 テイ。ひくし。
謄 トウ。—寫。
杯 ハイ。さかづき。
廢 ハイ。—止。
貧 ヒン。まづし。
敝 ヘイ。やぶる。
篷 ホウ。とま。
慢 マン。—性。
密 ミツ。—接。
懶 ラン。おこたる。
刺 ラツ。潑—。
裏 リ。うら。
卒 リツ。ソツ。利—。—先。
斂 レン。をさむ。
嗚 ヲ。あゝ。—咽。

淘 タウ。—汰。
叚 カ。かる。
抵 テイ。あたる。さはる。
騰 トウ。沸—。
抔 ホウ。すくふ。
瘢 ハイ。—兵。
貪 ドン。むさぼる。
敞 シャウ。あきらか。
蓬 ホウ。よもぎ。
漫 マン。—言。
蜜 ミツ。—柑。
懶 ライ。きらふ。
刺 シン。セキ。名—。
裹 クワ。つゝむ。
卒 ソツ。—倒。
斂 カン。あたふ。
嗚 メイ。なく。

昭和十二年六月十五日初版印刷
昭和十二年六月二十日初版發行
昭和十二年十二月廿一日訂正再版印刷
昭和十三年一月六日訂正再版發行
昭和十六年十月廿六日訂正三版印刷
昭和十六年十月三十日訂正三版發行

新制新撰女子國語讀本全八卷
定價 各卷 金六拾錢

編纂者 佐佐木信綱
武田祐吉

發行者 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 大阪市西區阿波座中通二丁目四番地
井下書籍印刷所
代表者 井下精一郎
(西大三五)

發行所 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

(略名) 湯川 佐佐木女國

日本出版配給株式會社 元配給
東京市神田區淡路町二ノ九

三年一組

水谷栖麻子